

お姉ちゃんのお姉ちゃんによるお姉ちゃんの
為だけのヒーローにな
る、です

瑠璃 耀

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お姉ちゃんの為なら私は幾らでも血を流せるです。

お姉ちゃんの為なら私は人だつて殺せるです。

誰でもないお姉ちゃんの為だけにヒーローになるです。

そこに障害は要らないです。

だつて、これは私とお姉ちゃんのお話ですから。

※幕間「溺れた柘榴」（R—18作品）もよければ。

<https://syosetu.org/novel/278901/>

目

次

73

渡我反榴：オリジン													
渡我反榴：オリジン	2												
入学試験：プロローグ													
入学試験：プロローグ	2												
実技試験：インバージョン													
実技試験：インバージョン	2												
逢引：フライアスター													
逢引：フライアスター	2												
入学：レクリエーション													
入学：レクリエーション	2												
体力測定：アクセラレーション													
体力測定：アクセラレーション	2												
体力測定：アクセラレーション													
体力測定：アクセラレーション	2												
	65	58	50	43	38	32	23	17	12	6	1		

帰宅：マイスイートホーム													
授業：ルベライト													
戦闘訓練：バーチカル													
戦闘訓練：バーチカル	2												
戦闘訓練：バーチカル													
戦闘訓練：バーチカル	3												
戦闘訓練：バーチカル													
始演：ヴィラニズム													
始演：ヴィラニズム	4												
始演：ヴィラニズム													
始演：ヴィラニズム													
始演：ヴィラニズム													
122	115	109	100	94	89	81							

渡我反榴：オリジン

前世で好きな漫画の、好きなキャラは「敵」サイドの子だつた。

血液愛好^{ヘマトフィリア}で血を吸つた人に変身して、ストレートな愛情と刃物で場を搔き乱した子。

笑い方や価値観が気持ち悪いと親に叱責されて自分を閉じ込めたけど、爆発して相手を切りつけてしまい警察に追われてしまふ事になつた子。

世間一般的には歪んだその感情を隠す事なく、むしろ堂々としているあの子。

私はその子の価値観を小さな頃から否定された事が気に入らなかつた。

いや、こんな良すぎる作品を作られた作者様に向かつてそんな事を言うのもあれだけどもさ。

普通にしなさいって、綺麗に笑いなさいって言われ続けて摩耗していく心に、彼女は実際耐えられなかつた。

そんな押し付けを言われ続ければ、殺人犯になつて歪んでしまうのは解つていただろ
うに。

そんなことが無ければ、もつと彼女は良い方向に生きられた筈なのに。
敵にならないで幸せになつて欲しかつた、なんて思いが湧いては沈む。

——ああ、いつその事。

私があの子の家族になれば良いのに——

「……ハルちゃん」

「どうしたのですか、お姉ちゃん」

パジャマを纏つた二人の少女が、ベッドに寝転び向かい合う。
物欲しそうにこちらを見つめる姉に、私は至極普通そうに返事をした。

突然だけど、私は転生した。

世界人口の8割が”個性”と言う特異的な能力を持つこの世界。

始まりは中国で光る赤子が産まれた事らしいが、それはそれで。

私には正直、漫画の中でしか聞いたことが無いような荒唐無稽なものだつた。

ていうか、本当に漫画の中なんだが。

残りの2割が”無個性”という落ちこぼれの中、憧れたプロヒーローのようになりたいと仲間と切磋琢磨していくお話。

私はこの世界に産まれる前から、この世界の事を知っていた。

そう、ヒロアカだ。

よりもよつて彼等の存在する世界に転生とは、なんの因果がどんな林檎か。

そんな私は小さい時に今世最大のくしやみをした衝撃で、前世と個性の2つを思い出した。

今世の名前と前世の名前、そして数十年という途方も無い記憶の濁流に2日ほど寝込みながらだが。

そして、反榴^{はる}という名前。

今世の両親に付けられたこの名前は、自分の個性とも相まって割と気に入っている。その両親とは、最近は殆ど話していないが。

「……ハルちゃん、どうしたの？」

と、ちよつと回想に耽つていたら姉が再度声を掛けた。

その少し下がった目尻に悶えそうなのを必死に我慢して、私は姉に悟られない様に返答する。

「なんでもないのですよ、お姉ちゃん。所で、今日も飲むですか？」

——飲む、という言葉を聞いた途端に姉の閉じ掛けていた目がぱつと開き、「……いいんですか？」

という呟きを零す。

とても小さくて切れてしまいそうな声だつたが、私はそれを聞き逃さなかつた。衝動を抑えようと苦い顔をする姉に私は慈愛でたっぷりの笑顔を向ける。

「良いのですよ」

うずうず、と布団の中で手が動く。

「私の身体は、」

チキチキ、という金属音に加えてか細いのに荒い呼吸。

「お姉ちゃんだけのモノなのです」

——その言葉を最後に、姉と私は獣になつた。

渡我反榴：オリジン 2

獣、とは言うがそこまで過激なものでもない。

ただ――

「は、むつ……！――つ、はつ、ふつ――」

「つぎ――あつ、つ痛……」

お姉ちゃんが一心不乱に、傷から滴る私の血を吸つてゐるだけだ。

許可してすぐに私の腕に飛びついた姉がカツターで私の手首を切り、ぶつくりと出てくる血を癌が出来るくらいに吸う。

ぢゅうぢゅうと癌が出来そうなくらいに吸い付く唇に一瞬だけ顔を顰めたが、それもすぐに霧散した。

傍から見たら、^{（マトフイリア）}血液愛好が自分の妹の血を飲むかなり危ない光景に見えるだろう。

――そんな行為を一切の抵抗をせずに受け入れる私は姉よりも危ないのかもしねないが。

舌を這わせ、腕を掴みはするが先程よりもゆつたりと行為を続ける姉の頬を、私は何と無しに撫でる。

「んむ、んふふ……」

「ん、い”つ」

撲つたそうに顔を振り、照れ隠しか腕を噛まれた。

そこに家族だからという容赦は何處にも無く、まるで固い豚肉を噛み千切らんという位の強さが含まれている。

痛い。

刺さるように痛い。

傷が熱を持つて、ジンジンと痛む。

だが、それすらも気持ち良いと感じられる。

——こんな私は、きっと苦痛愛好^{アルゴフィリア}だ。

姉からの痛みすらも快感へと変える被虐性欲^{マゾヒスト}。

「んあ、む——つ」

「つ……ふ、う——あぎつ」

はふ、という吐息の後に強い痛覚。

ぶちりと掌の皮が無理矢理剥がされ、そこから溢れる血が姉の口内へと入る。

——ああ、痛い、痛い、気持ち良い、もつとして欲しい。

目を細め、荒い鼻息のままで舌を傷へと押し付ける姉を見て、狂おしい程の愛おしさと手から伝わる痛みにお腹の奥が疼く。

「つ、ああ……お姉ちゃん、おいしいです？」

普段は細められている自分の目を姉の為だけに開き、その深い琥珀色の瞳いっぱいに彼女を映す。

「んつ、んく……えへへ、おいしいです」

その質問に少し慌ててコクリと喉を鳴らす姉。

割と多い量を口に含んで味わっていたのだろう、吐いた息は鉄の匂いがした。

「……つ」

——その鉄は私の身体から出たもので。

私の血

——それは、先程まで姉が赤子の様にこくこくと飲んでいた。

——さらに考えてしまえば、今姉の中には少くない量であろう私の血血が入つている事に気が付く。

「……ふふ、にへへ」

姉の身体の中を現在進行系で汚していると理解したとき、私の頬はだらしなく緩み熱を持つ。

それに併せて息も荒くなり、頭がぼうつとして、ぞくぞくと背中が震えた。

姉の顔も笑みが深まっている辺り、今の私は匂いがするのだろう。

「お姉ちゃん……こっちも、です」

爆発しそうな本能を押し流してもらう様に、私はいそいそと首元に貼られたガーゼの下を露出させる。

姉がごくりと喉を鳴らすそこは、今までに何百回と同じ事をされていて跡の絶えない

噛み跡。

私達の最初の愛で、永遠の証でもある首元の傷。

跡が消えて欲しくない、と願うのは私のちいさな我儘。

だから毎日の様に絆創膏で誤魔化し、そして毎日の様にそこをどろどろに汚してもらうのだ。

「よ、い……しょ」

肘を支点に少し起き上がつた姉の、すぐ真下に位置するようにごろりと転がる。

そのまま姉の頬を両手で挟むと、先程噛み千切られた右手から微かな痛みが。

「ん……」

びく、と反応した私に姉は極めて優しく笑い、上から覆い被さる。

ぎしりとベッドが軋み、至近距離で姉の明るい琥珀色と私の暗い琥珀色の視線が交わった。

その瞳には、私しか居なくて。

私の瞳にも、姉しか居なくて。

その事にお互いどうしようもない幸福感を感じ、だんだんと上気した吐息が絡んでいく。

——そして。

「…………きて？」

吐息と絡んだ私の言葉が、姉の顔を引き寄せた。

入学試験：プロローグ

3年間着慣れた制服を身に纏い、蝶結びのリボン（テープ式）をくつつけた私は、鏡に映る自分の姿を見てよしと頷いた。

私——渡我反榴トガハルがこの世界に産まれて15年。

前世も合わせれば45年と我ながら若干口リババアな気分だが、この年度末近い時期のどきどきは何時になつても褪せないものだなど常々思う。

今日は雄英高校の入学選抜がある日だ。

昨日の夜まで復習をしていた私に筆記は敵ではないだろう、姉の夜食もあつたし。

そんな事を考えながら、鏡の前で微笑む自分を見る。

姉と同じ金髪はふんわりしたボブにし、姉にしか見せていない虹彩は暗い琥珀色。それが小さい顔に付いていて、身長的な問題が若干……いや、かなり著しい。

15歳にもなつて身長が124cmから伸びないのは前世からの影響なのだろうか。

そして首元と腕、手首とお腹 etc.に付いている傷跡は昨夜絆創膏を付けていた為に、隠せないメンヘラ感が漂う。

首元の噛み跡を慈しむように撫でると、私の笑みはだらしなく深まつた。

「ハルちゃん、ご飯出来てますよ」

「あ、今行きます」

そんな私を呼ぶエプロン姿の姉——渡我被身子。

一つ上の姉であり、普通なら敵である敵連合の構成員になる人だ。

そんな彼女がどうしてエプロンを付け、るんるんと料理をしているか、だつて？
その答えは単純明快。

私が姉の欲求を全て受け止めていたからだ。

親から普通にしてなさいと言われ続けてきた姉は、このまま行けば中学3年の最後の日に欲求が爆発して好きな男子を切り付ける筈だつた。

そうなる前に私は動き、姉の性欲と衝動の捌け口として多くの生傷を負うことにした
のだ。

切られ、吸われ、噛まれとされていくうちに自分が被虐性愛マゾヒストである事に気付いたのは
驚いたが。

「くく♪」

だが、それだけだ。

そうなつたお陰で、姉は原作と違ひ非行に走る事の無い、明るく優しい人になつた。
そんな姉を見られるなら、苦痛愛好アルゴフィリアだとか被虐性愛マゾヒストだとかは喜んで抱えようと思う。

その代わり、私も両親から疎まれる事になつてしまい家に帰つて來ることもほんなくなつたが。

「「ゞ」ちそうさまです」

「今日は雄英高校の入試でしたけど、大丈夫ですか？」

朝食を片付けて弁当を手渡した姉が聞く。

「筆記は多分行けますけど……実技がどうなるかで決まるかなあ、と思うです」

筆記は前世の復習チートがあるから大丈夫なのだが、実技に関しては直前まで知らされてない為に不安要素が多いのだ。

「それなら、ハルちゃんはきっと受かりますよ。トガの大切な妹ですもん♪」

そんな私を抱き締めて額に唇を落とした姉がふわっと微笑む。

それだけで、不思議と私の不安が吹き飛んだ。

「……ありがとう、です」

「えへへ、それじゃあ行きますよ！トガもバイトですし」

用意するので待つてて下さーい、と自分の部屋に走つていった姉の背中を見送り、私は思考を巡らせる。

——雄英高校に入学するのは、姉と平穏に暮らす事とは別にもう2つ理由がある。今回の試験は可能な限りのポイントを獲得するつもりだ。

それは討伐P然り、救助P然り。

そうしてA組に入つたとき、私という通常では存在する筈の無かつた異物と姉の居ない敵連合がどう変わるのか。

欠番のままか、それとも私の知らない誰かが代わりに入るのか。

そして、その敵連合——もとい、Aオール・フォーワンF Oが、私の事を緑谷達と同列——要注意人物とするか否か。

人口の8割が個性を持つこの異世界で、私はどこまで未来を変えるのかを知つてみたいのだ。

「お待たせしましたよ!」

と、考えを断ち切るタイミングで姉が戻ってきた。

短すぎない黒のスカートと黄色いパークー、その上に着た大きめで灰色のジャケットに白のショルダーバッグ。

似合い過ぎて鼻血出そう。

「確か……駅まででしたよね」

「うんっ、そこまでは一緒です!」

そう言つて手を繋いで、にぱあつと。
笑顔を見せた姉に、私の心は溢れる程に満たされたのだった。

入学試験：プロローグ 2

両親から自立した、というか極端に帰つてこない渡我家は一応愛知県内にある。

まあその中でも都心寄り、といった所だ。

そして私がこれから向かう国立雄英高校は都内にあり、私は電車でいくつか乗換を経て向かうことになる。

割と遠いが、登校出来ない訳でもない。

早起き？姉妹揃つて大得意ですがなにか。

しかし、これとは別にさらに驚くべき事がちゃんとある。

それが、雄英高校は偏差値79、さらに合格倍率が300倍もあるとの事。
うん、

おかしいでしょこれ

きっとおかしいと思ったのは私だけじゃない筈。

前世でも私の友達がこの倍率はやばいって言つていた気がするし。

かく言う私も前世じや「はつは、何コレw」って笑い飛ばせたけど、いざ転生してこれを目にした時は素で「まじ?」と零した位だ。

原作キヤラ達良く受けられたよね、上鳴とか芦戸とかそこら辺が特に。と、そんな逡巡をしているうちに目的の駅に到着、いつの間にか満員になつていた列車が停止した。

ホームを出れば、通りはもう既に雄英を受ける生徒でごつた返している。

そしてよく見れば原作でも見た事のある面々がちらほら居たり居なかつたり。

「多いですねえ……ん」

そんな感想の後に鳴つたスマホを持ち、身長差と密度に揉まれそうになりながらも道の端に寄つた。

『ハルちゃんはもう到着ですか?』

通知欄から飛んだメッセージアプリには、姉からの一言とデフォルメされた可愛い猫が首を傾げているスタンプがあつた。

もう猫も可愛いけどお姉ちゃんも可愛いです。

だんだんと増えていく人に流されながら、私は至極普通そうに返事をした。

『こつちは今正門前です。人が多すぎて自動で流れていますよ』

『やっぱりヒーロー育成校は違うんですねー』

『ですねー』

ゆっくり流れていた人混みも和らいだところで、正門を通る。うーんこれはまたデカい。

もう説明すら不要。

敷地もだけど校舎もやばい。

間近で見るそれに圧倒されていると、不意に後ろから声が掛かる。

「止まってるけど、大丈夫？君」

「ほえ？あ、えっと……だ、大丈夫です」

突然の事に驚いて振り向くと、オレンジ色のサイドテールで少しサバサバした印象のある女子。

身長が高くて羨ましいが、この子は確か――

「あ、私は拳藤一佳。そつちは？」

そう、拳藤さん。

確かに原作ではB組だった、手がでかくなるという増強系の個性を持つていた筈。

「ご丁寧にありがとうです……私は渡我反榴つて云うんです、よろしくですよ」

「よろしく……で、あのさ。良かつたら教室まで一緒に行かない？」

お互い一人だから丁度いいかなってさ、と早速お誘いをしてくれるあたり男勝りとい

うかきつぱりしているというか。

まあでも、否定する理由はない。

「はいっ、喜んで、です！」

そう言つて横に並び、流れで手を？いで歩く。

「…………ん？」

「…………んえ？」

そしてピタリ、と同時に足を止めた。

そして自分の左手を見、拳藤さんの顔を見た私の顔は茹で蛸の如く真っ赤に染まる。

「…………あ、ご、ごごごめんなさい！あのそのえっと、お姉ちゃんとおでかけする時
がいつつもこうで、えつとその癖と言いますか流れでと言いますかあうあうあう」

「ああああ落ち着いて落ち着いて深呼吸深呼吸はい吸つてー吐いてー」

恥ずかしさと混乱でしどろもどろになつたり必要のない情報を出してしまい更に混
乱したところを、拳藤さんが背中を擦つて落ち着かせてくれた。

ふうー、とお互いに一息つく。

「…………ごめんなさいです、お見苦しい所を……」

「良いの良いの、私もなんか緊張解けたし」

そう言う拳藤さんの顔はふわりと緩んでいた。

すつごい、男前だこの人……

「ほら、行こ？ うちらも行かないと遅れちゃいそうだし」

「です！」

そう締め括つて再び歩き出す私達の間には、もう既に「顔見知り」という壁は無くなつていた。

——午前を使つた筆記試験はかなり楽だつた。

流石前世の記憶、今回ばかりは感謝である。

そして筆記を全て終えた私は、荷物として持つていたリュックを背負つて講堂に行く。

がやがやとざわめきと足音に飲まれ掛けた私は、再び拳藤さんに助けられた。その時にちつちつ言いねと言われて若干凹んだが、それは良いとして。

『今日は俺のライヴにようことそー!! エヴァイバヒセイハイ!!!!』

「「「「…………」「」」

ぱちぱちぱち……つて、え?

「……あれ?」

『いい反応してくれたのはお前だけだぜミニガール……』

『説明前のプレゼント・マイクさんが、ただただ可哀想だったという事だけはここに残しておく。』

つておいコラ、ミニガール言うなし。

私まだ成長途中だし……

実技試験：インバージョン

「仮想敵ヴィランですか……」

「沢山出るんだね」

隣同士で座った私と拳藤さんは、説明を聞いて小さな声で話す。

——実技試験の概要是原作と同じ。

1P、2P、3P、そして0Pの仮想敵ヴィランを倒していくポイント制だった。

「……本当に、それだけでしようか……？」

「ん、どうしたの？」

「あ、いえ。なんでもないです」

そう、これだけじゃない。

きっと、というか確実にこの中には救助ポイントという項目も存在している筈。

敵の殲滅だけじゃヒーローは務まらないぞ、という事だろう。

それを一般開示しない辺り流石だと思う。

……あ、飯田さんが質問してる。

やはりまだそんなに介入してないから、原作通りなのだろう。

緑谷さんが黙らせられるまでちゃんとセットだ。

「……あの緑の人、凄い洞察力ですねえ」

「え、ああ……さつきのブツブツつて」

「はい、場面設定とか規模とかを考えてる様ですね」

半分適当だが、間違つてはないとだろう。

どうせ雄英だし、この都市部というステージもデカいのだ。
いやデカいしくつかあるんだけど。

そうしてゐる間にも、プレゼント・マイクの説明は続いていく。

『――つてことで、俺からの説明は以上だ。最後にリスナーの君達へ我が校の校訓を贈ろう。

――かの英雄、ナポレオン・ボナパルトは言つた。

真の英雄とは、人生の不幸を乗り越えていくもの！

Plus Ultra
更に向こうへ！

それでは皆さん、良い受難を!』

原作通りの口上に拍手を送り（今度は皆もやつてくれた）、わらわらと講堂から出でいく。

此処からは拳藤さんと別々に、それぞれ試験を行う。

拳藤さんはA会場で私はB会場。

確かA会場は緑谷さんとかが居た気がするなあ、とか、私がA組に入つたら誰が抜けてしまふのだろうか、とかいう予想とかをもやもやと巡らせながら、拳藤さんと（いつの間にか）繋いでいた手を離す。

頑張つてと激励を送り合つて別れ、私は三度人波に流された。

ぐいぐいぐい、と揺られながら進み、その人混みが晴れた所で私も息を吐く。
やはりデカい。

向こう側が見えないとかどんなステージですか。

いや試験のステージだつたわ。

「さて、確か……」

一息ついた私は再度リュツクと竹刀入れを背負い、ガチャツと重そうな音を鳴らす棒達を見やる。

棒達と言つてもゴルフフラグ——アイアンとかパターとか普通の鉄パイプとか、要らなくなつたものを搔き集めただけなのだが。

その音を聞いた周りの人が怪力でも見るような目でこちらを凝視してくる。すぐに解りますよ、と頬を若干膨らませていると。

『はいスタートー』

その気の抜けた声と共に私は個性を使用し、スキップでロケットの様なスピードを出した。

「くく♪」

先程まで怪力を見るような視線を送っていた人達が、今度はぎよつとして私の背中を見送る。

私を見て急いで走り出す人達も居るが、それはそれ。

姉の料理中によく聞く歌を口遊みながら、後方の集団をぐいぐいと離していく。

『どうした、試験はもう始まってるぜ！走れ走れ！実戦じやあカウントダウンなんてねーんだぞ！』

と、プレゼント・マイクが催促して漸く後続が走り始めた。

個性で飛んだり滑つたりして早くポイントを取ろうとする、が。

——もう遅い。

「えーいっ♪」

個性を発動して誰も居ない方向に向かつて拳を突き出せば、私の身体が文字通り吹き飛び。

「よいしょっと……こっちですね♪」

着地の瞬間に個性を使用して墜落を防いだら、再度発動してパターを2Pへと投擲。豪速で飛んでいくそれは後ろに居た3体くらいをゆうに巻込み、纏めて停止させた。

「ええええなんだなんだあの娘怖い怖い怖い

「なんだあの動きやばつ!?」

「満面の笑顔が逆に怖いんだけど!!」

こんなにアクロバティックな動きをしてはいるが、これはれつきとした一つの個性だ。

個性で飛んで、投げて、たまに仮想敵ヴァイランの装甲を個性で剥がしたりして着々とポイントを稼ぐ。

これには受験生には勿論、教師陣も驚いているだろう。

——その途中。

「うわああつ！！……あ、あれ？」

「大丈夫ですか～？」

「あつ、え、と……」

「大丈夫そうですね、ですが念の為これを持つて下さいね～」

「えっ、絆創膏ヴァイラン!? つて行つちやつたし……」

仮想敵の群れに運悪く追い込まれた受験者を助けたり。

「そこ擦り剥いてますねえ、ちょっと失礼しますよ～」「つ痛……ごめんね、ありがとう」

「いえいえ、お互い様ですよ～」

制圧が完了した区域で負傷者の介護にあたつたりもしていた。リュックを持っていて良かつた気がする。

多分普通は取られるだろうけど、私のリュックには竹刀入れが縫い合わされているのだ。

先程中身を見られたけど、あの量の棒類を手で持つて行かせるのは流石に駄目だと思つたのだろう。

教師陣には感謝だ。

『残り1分！ラストスパート、まだまだ頑張れ！』

——と、運び込まれていく負傷者に処置を施していれば、ラストスパートになつているのにも気付けなかつた。

「確か、0Pが出るんでしたよね」

「そつ、そうだけど……まさか行くとか、無いよね？」

近くにいた腕が翼になつている女の子の受験生にそう聞くと、体格差からだろうか心配されてしまう。

「ふふふ……ヒーローは、一芸だけじやあ務まらないんですよ？」

何時かのアングラ系ヒーローが言つていた言葉に、心配していた女の子は止めようと口を開く。

そんな彼女の口に持つてきた携帯食料を突っ込んだ私は、モゴーツ!!と叫ぶ彼女を無視して会場の中央へ吹つ飛んだ。

周りの人も何か言つてるが、無視無視。
途中でパンチやキックを駆使して高度を調節しながらその問題のロボットを見てみれば。

「実際に見るとほんとヤバいですね」

今まで出てきた仮想敵ヴァイランのどれよりも重厚で、頭にでかでかと〇という文字が書かれたロボット。

一步踏み出せば建物が崩れ、軽い地震が発生する。

まるでM.t. レディの巨大化位はありそうなパワーと大きさだ。

「こう見ると、リアル『人がゴ○のようだ』ですよ」

そんな感想を零しながら、逃げ惑う受験生の流れに逆らつてOPの目の前に着地。

「まあでも、私にとつては好都合なので……」

——お姉ちゃんの為に、壊れてもらいましょか?」

細められた目のまま、私はにつこりと微笑んだ。

実技試験：インバージョン 2

数えてみても、制限時間は残り30秒もない。

なのでさつさと頭の中でルートを構築し、ニタリと笑った。

「はいっと！」

早速一步踏み出したロボットから逃げるよう跳び、『自分のジャンプ力が低い』をベースに”反転”させる。

するとあらびっくり、普通じゃ1mも飛べなきそくなちんちくりんがOPと同じくらいにまで飛び上がつたではないか。

飛ぶときに勢い余つて一回転したが、パフォーマンスと思えばそんなに悪くもないかななんて。

「えい……やつ！」

そんな事を思いながら、私は背中から取り出した鉄パイプと竹刀をOPに向かつてぶん投げた。

勿論個性は使つており、今回は『投げた2つがロボットの首元を跳ね飛ばさない』と『投げた2つのスピードが遅い』の2つを反転。

すると今度は、2つの棒がなまじ私の腕から振るわれたと思えない速度で真っ直ぐにロボットへ向かい、一切の減速も無しにそれの首を挟み込む様に壊す。

飛んでいく途中に風の音がしつかり聞こえてきたのでかなりの威力だろう。

「ふむ……4つ、ですか。まあ妥当ですね」

そう咳きながら自由落下する自分自身に『落下速度が上がっていく』を反転させて着地したと同時に、ガギヤンという耳を劈く音を聞いた。

「……つと。処理を忘れる所でしたね！」

ホツとするのは一瞬。

首と胴体の落下に備えてもう一度跳躍した私はさつさとOPに触れ、『下に掛かる重力が弱い』を反転。

「ひやつ」

瞬間、地面へと向かう圧力が限り無く高まったOPが地面にヒビを作りながらも潰れ、めり込んだ。

すつごい拷問でも出なさそうな音が出たので軽く変な声が出てしまったが、誰も聞いてないから良しとしよう。

『終――了――!!!!』

あ、終わつた。

ちよつとふらつく頭に手を添えて、ため息を一つ。

個性の頻発で精神力が削られているのだ。

まあ実際移動十攻撃十強化でほぼフルバーストだつたから、当然つちやあ当然というか。

氣を張つてないと目眩を起こして倒れそうだけど、家に帰るまでぐつと我慢。

家でお姉ちゃんにどろどろになるまで愛してもらいたい、と私の本能が叫んでいる。

……いやしかし、そうしてもらうのは合格が決まつたらでも良いのではないか？

私は雄英高校に受かつたのとお姉ちゃんに愛されるので嬉しい、お姉ちゃんは私がヒーローになれる道に立てたのと私を愛せるので嬉しい。

これはまさか W i n — W i n の関係！？

「………… オイ」

と、そこまで思考を巡らせて再び個性で飛ぼうと思つた私の背中に、低くて男らしい声が掛かつた。

「——ほえ？ なんですか？」

その声の方に振り向くと、爆発したようなツンツンの髪を持つた男子生徒。

彼は確かに、爆豪勝己。

緑谷さんの幼馴染で開いた口が塞がらない位の戦闘センスを持つている、いわゆる問題児。

そんな彼が、一体どうして私に？

「お前、どうしてソレに挑んだんだよ」

そうして顎で指す先は、先程壊した0P。

その質問に、ああと少し納得した。

殆どの受験生は討伐ポイントのみを稼ぐ為に1P～3Pを壊していく。
だが私が最後にやつた0Pはただのガラクタ、壊すメリットもポイントも何もないだけ。

なのにどうしてわざわざコレを手を向けたのか、彼は一番気になるだろう。

「うん……強いて言えば、自分がヒーローとしてこの場面に居たら、きっとこうしていたからですかね」

口元に指を添えて逡巡した答えをそのまま言うと、彼はそうかよ、と短く返してそのまま飛んでいつてしまつた。

そういえば彼も爆破で飛べたなあ、なんて思いながら私はちょっと小走りで負傷者の集まつていた区間へと向かつた。

あの後戻ると翼の生えた女の子からは泣かれて怒られた、ごめん。

流石に単身凸は無謀すぎだよばかばかばか、と抱き締められたまま胸元を殴られた、ほんとごめんね。

まあ心配させたのは本当なので、謝つて優しく頭を撫でたらすぐに立ち直ってくれたが。

その後すぐにリカバリーガールが来て、負傷者の傷が処置されていた事に驚いていたのは余談だ。

鍵を開けて家に入ると同時にリボンを外す。

個性の反動と電車の揺れで眠気が酷く、何回寝落ちたことかとため息を吐いた。

「ただいまですよー」

「おかえりなさい～！」

そんな私に満点の笑顔で包丁を片手に抱き着いて来る姉。

危ないけど扉は閉めているしちゃんと誤爆しないように配慮してから秒で許す。

「試験どうでした？」

至近距離で微笑みながら聞く彼女に、私は。

「——きっと、上手く行きましたよ」

唇を優しく奪つてそう言うのであつた。

逢引：フライアスター

入学選抜の終わった次の日は土日という事で、まず土曜は二人で「ころころいちゃいちゃして過ごした。

そして次の日の始まりは姉のこの一言。

「デートしましよう！・デート！」

という言葉に即同意して、私と姉は都内に出向く事に。

姉が何を言っているか解るだろうか？

私には解る、受験を終わらせたご褒美という事だ。

まあご褒美の本番は合格したら、だろうけども。

「……それで、最初はどこに行くですか？」

「まずは服屋ですよ！ハルちゃんに似合うやつたくさん買いましょ！」

絡められた手を引っ張られて服屋を探す。

——ああもう、手から伝わる体温が愛おしくて堪らない。

姉は前を向いているから解らないと思うが、多分今の私が蕩け切った顔をしているであろう事はしつかり解つた。

入試のように人混みに流されそうだつたけど、姉が先導してくれるお陰で逸れる等のイベントもなく無事に大手の服メーカーの店に入る事ができた。

やはり都内という事で店内はかなり広く、多彩な服が展示されたりしている。

店員がその店の服を着ているのも好みだ。

……だが、服の値段が高そうなのは見ない事にしよう。

ゼロが一つ多い気がしたけど私は何も見ていない。

……あ、安いのもあるんですか？

そつちはオーダーメイドだから……ああ、そうだつたんですね。

閑話休題。 話を戻して

そんな店員さんからの微笑ましい視線を浴びながら、やつてきたのは春服のコートナ一。

「うーん……ハルちゃんはやはりパークーな感じですねえ」

「そうですか……？」

入つてすぐに姉からそう言われた私は、ふと今までの私服を振り返つてみる。
えーと、姉と遊園地に行つた時、姉とゲームセンターに行つた時、姉とお部屋でいちや
ついた時……

「……ですね、私基本パークーでした」

「ハルちゃんは萌え袖がカアイイからねえ」

そこまで思い出して、そういうば殆どの洋服がパークーにキュロットだつたなど解つ
た。

多分、緩い感じの服が自分には合つてているのだろう。

「あ、これ着てみてもいいですか？」

「ふうむ……それならこれと合わせましょ！」

そうしてパステルカラーのパークーに姉が合わせたのは、私があまり履いた事の無い
スカートタイプのもの。

ベージュという落ち着いた色合いがパークーによく合うのもいいチョイスだ。

勿論、それを着ない選択肢等ない。

「じゃんつ、です！どうですか？」

しゃつとカーテンを開けて姉に聞いてみれば、大して間も置かずにサムズアップが

返つてくる。

その口が楽しげに歪んでいるのは、きっとこの後も色々着せるからだと思う。きつとそうだろう。

「じゃあ、次はこれを合わせて……あつ、こつちも！」

……姉の両腕に抱えられた数セツトの服が無くなるのは、昼を過ぎる頃になりそうだ。

「週末のお買い物みたいな量になつちやいましたね」

「全部ハルちゃんに似合つてたのが悪いですよう」

「二時間以上着せ替えた理由がそれですかあ……まつたく、そんな事を言う口はこうですよお！」

「ひやふえへえ～！」

——あの後、いつの間にか来ていた店員さんも参加して着せ替えられてしまい、気付けば午後2時を優に過ぎてしまっていた。

両手には上下合わせて20着はありそうな服がずつしりと入った紙袋。

新しい服を着て姉とデートできると解ればすぐさま嬉しさで一杯になれた。

そんな私はかなりチヨロいんだと思う。

「それにしても、やはり混んでましたねえ」

「でも30分待ちした甲斐があつたと思うですよ」

その買い物の後に向かつたレストランは、週末という事でかなり混み合っていた。

私は牡蠣フライ定食、姉は麻婆豆腐をそれぞれ頼んだのだが、これが結構美味しい。食前に見たパスタやカツ丼なども美味しそうで、目移りしてしまつたのは内緒だ。
……うん、作つて欲しいし今度牡蠣買つて来ようかな。

「美味しかつたのは否定しないけど……なんか悔しい気分になります……」

「ふふつ、私はお姉ちゃんの料理が一番好きですよ」

「……んにえへへへ、今晚は何にしようかなあ」

「ン”ン”ツ」

にへーと笑顔になる姉がやばい程に可愛くて鼻血が出そうになつたが、これをかなり
頑張つて堪えた私は偉いと思う。

逢引・フライアスター 2

突然だが、姉の嗜好について少し語ろうと思う。

私の姉は重度の血液愛好^{ヘマトフィリア}で、血に関する事が好きで好きで堪らない猛獣になる程のレベルだ。

それでも私の血を吸えない時なんかは多くあり、何もしないでいれば暴走なんて事も（何回か経験した）。

だから、どうにかしてその衝動を抑えないといけない。

そんな姉が吸血以外にその欲を抑えられる事になつた手段というのが、ゲームだ。

それもゴリツゴリの流血系ゲーム。

バイオ○ザードとかゾン○シユーターとかSI○ENとか、ぐつしやぐしやに敵が血を吹き出すタイプのゲームで血をたっぷり見て、衝動を抑えている。

まあ結局私が帰つてきたら気持ちが爆発して吸つちやうんだけどね。

毎回飛び付くから怒らないとつて思うけど噛まれた痛みと姉の暖かさですぐ許しちゃう。

どうしてこんな話を突然したんだ、つて？

「あつははは!! ハルちゃん右い!!」

「ですーつ！ あつ、お姉ちゃん上も」

「にやははははは!!」

今、現在進行形で姉の欲を抑えてるから。
駅前をぶらついていたら姉が暴走しそうになつた中、こんな大衆の前で血を吸わせる
なんて恥ずかしい事はできない。

……え、被虐性欲(マゾヒスト)だから大丈夫だろうつて？

何を言つてるの、私が被虐性欲(マゾヒスト)になるのはお姉ちゃんと二人きりの時だけだよ？

そもそも私自身被虐性欲(マゾヒスト)とか苦痛愛好(アルゴブリリア)とか言つてるけどそうなつたのは全部お姉
ちゃんへの愛があつたからだしそれを他の人に見せ付けたりするの性に合わな——
——あ、聞いてない？

……
閑話休題(ソラツキヨウイチ)

まあそういう訳で、私は現在姉の一時の平穏を守る為に慣れないビー〇トバス〇ーズ

をやつてているのです。

たまに弾を外しながら、リロードの間に姉の方をちらりと見る。

「うらららららららつ……ありや？ 弾切れ……」

「ン、ン、ツ」

トリガーハッピーしていたらいつの間にか銃がカチカチと鳴らされるだけになつてしまい、ほえ？ と呟いていた。

可愛い。

あつ鼻血出そう、でも今出したら抑えた意味無くなっちゃう。

「リロードリロー……あ」

「あつ」

そんな間にも迫つてくるゾンビを私達は対応しきれず、3ステージ中2ステージ目の撤退を余儀無くされた。

「うむむ……もうちょっと連射性が高ければ……」

「まあゲームですから……」

ドゥーンという重低音と共に浮かび上がるYOUR DIEDの文字とぼやく姉に、

私はええ…と苦笑い。

だが、これで姉の欲もかなり収まつ

「他にも沢山ありますけ

「えいつ」

「へ？」

——ではなかつたみたい。

振り向ければ、既に姉はコンテニユーフィーの料金を払っていた。

カーソルをさつさと合わせてクリックし、すぐにカウントダウン。
「んに”やつ、待つ用意が!?あつ、あ————!!」

この後更に4回死に、その度にコンテニユーする事になつた。

だけどボスを倒した時の弾けんばかりの笑顔が途轍もなく可愛かつたのでもう全部
許す。

「……あれ」

「ハルちゃん、それは？」

お互に凹んだり喜んだりして残りの時間を過ごし、もう午後4時に差し掛かる頃。晩ご飯に足りない物を買い足して鼻歌を歌いながら家に戻ると、ポストに見慣れないものが。

「雄英高校からですね」

「おお～：合格通知？受かつてるかなあ……」

「それにしては些か嵩張るといいますか、重いといいますか」

触った感じ、ゴツゴツしてて硬く、小さな機械の様だ。

実物を見るのは勿論始めてだが、ここからオールマイトがホログラム出でくるつてなると、前世よりもテクノロジーが発達していると言つてもいいのかも知れない。

「んー……ま、先に夜ご飯ですね」

私はそう言うと、姉の手を引っ張つて家に入った。

「うんっ、今晚はペペロンチーノですよ♪——んっ」

扉を閉じてすぐ、彼女が唇を重ねる。

所謂おかえりのキスだ。

どちらからともこれをやると決めた覚えは無いが、一緒に帰つてくると毎回してくれる。

あまりディープな物をするとお互にスイッチが入つてしまふので我慢だが、そう

ならないようになると大義名分を立ててフレンチを何回もしてしまうのがオチだ。

だつてお姉ちゃん可愛いんだもん、しようがないよね？

そんな自問自答を繰り返しながら、ちゅつちゅつと姉に唇を啄まれ続ける。

……が、そろそろ姉のスイッチが入りそうなので、中断させる事にした。
「んっ——はあ……お姉ちゃん、続きは後で……ですよ？」

「——う、ん」

7回目のキスをしようと顔を近付ける姉の唇に人差し指を置き、微笑んでそう制止すると彼女は寂しそうな表情をしてすごすこと離れる。

それを見て、姉に犬耳と尻尾があつたらしく一んと垂れているだろうな、なんていけない思考をし始めてしまい頭を振る。

「お姉ちゃん」

「……？」

もうちょっと見ていたいけどそうしたら夜ご飯が遅くなってしまうので、至極優しい声で姉を呼ぶ。

そして、

「後で、」

甘い吐息と共に、

「たあつぱり、」

ソコの付近を撫でれば、

「——下さい、ね？」

姉は、この上なく悦ぶのだ。

入学：レクリエーション

「やつと、着きましたね」——雄英高校

家から電車を使って数十分、そして通学路の人波に流されて数分。

雄英高校の制服に身を包んだ私は、この広すぎる敷地に建つ雄英高校の校舎を震える脚を押さえて見上げていた。

「しかし、首位ですか……まあ、解ってはいましたが」

そう、私はこの入試を首位で通過していた。

まあ筆記は前世の記憶があつたから解るが、問題は実技だ。

「それでも、戦闘P32の救助P55は……流石に、やり過ぎたですね」

合計して87P。

原作での爆豪さんの77Pを10も上回る結果となっていた。

しかも爆豪さんとは同じ試験会場だった為に、恐らく原作よりも爆豪さんのポイントは低くなってしまっているだろう。

……待てよ？

まさかこれはもしや、体育祭の宣誓とかなんか色々やらされる？

その他色々なイベントが盛り沢山なこの高校でなんでもかんでも首位に任せられてしまう？

ああでもそれだとお姉ちゃんに見てもらえるからそんなに悪い訳でもないって思っちゃう……

顎に指を添えてぐつと考える。

「…………ま、その時はその時です。…………それにしても、うん」

…………だがすぐに考える事をやめ、袖口の辺りを見やつた。

そんなに気にしていい訳でもないが、これは――

「あれ、渡我さん？ 合格してたんだ、よかつた」

「ほえ？――あ、拳籠さん」

思考が引き戻されると、そこには同じく雄英高校の制服を着た拳籠一佳さんが。

「拳籠さんも合格してたんですね、良かつたです♪♪

ぴよこぴよこと駆け寄つて隣に立ち、ばつと左腕を上げる。

いえーい、と二人でハイタッチをしてお互いの健勝を称え合つた。

「うん、お互い行けてよかつたよ……んで、所でなんだけど」

「はい？」
「ソレ、デカくない？」

〔制服〕

そう言われて、ぴしりと固まる。

拳籠さんは言わないでいてくれると思ってたのに、一瞬でフラグを回収されてしまつた。

——そう。

どういう訳か、今の私に合うサイズの制服が何故か無かつたのだ。

二周り大きいサイズの制服は私の小さい体躯をふかぶかと隠し、スカートは折り込んで短くして手首に至つては完全な萌え袖となつてている。

一言提言しよう。

どうしてこうなつた

「ですよね……凄く、大きいです……あはは……手が、見えないですねえ……」

「ああああほら飴あるから落ち着いて？ね？ほらいちご味だからきつと気が紛れるし」「もぐ」

あはは、と半笑いで落ち込む私の口に丸くていつの間にか包みの剥がされた甘い球体

が半ば無理矢理突っ込まれる。

「いちごおいしい……というか今どこから飴出したの？」

「ありふあほれふ……うん、元気出ました」

「良かつた、ほら行こつか」

私の隣に差し出された手をナチュラルに繋ぐ。

また繋いじやつてるなあ、と歩き始めてから気付いたが、まあいいやと考えるのを止めて私は鼻歌を歌いながら拳籠さんと校舎に入していく。

なんだか周囲が煩かつたけど、当の私は飴の美味しさで頭がいっぱいだつたのでそんなに気にならなかつた。

「扉、でつかいですねえ」

直前に拳籠さんと別れてA組の教室の前で首を上げた私は、そう呟いた。

天井までありそうな高さの扉は、私をひい、ふう、みい……五人分は優に並べられそ
うなほど。

そんな重そうな扉をよいしょーと開くとそこは。

「失礼しま」

「おい、君！机に足を乗せるんじゃない！その机を作った製作者の方に失礼だと思わないのか!?」

「ああ！と思うわけねえだろモブが！てめえどこの中だ！」
「俺は聰明中だが……」

「……いやまあ解つては居ましたけども……」

一触即発、とはこの事を指すのだろう。

入試の時に少し話した爆豪さんが机の上に足をドンと乗せていて、飯田さんがそれを咎めている。

このタイミングという事は、原作主人公の緑谷さんはもうすぐ来る辺りなのだろうか。

しかしこの会話があ……と思わず眉間に手を当ててしまつた。

「……？やあ、お早う！はじめましてだな、俺は飯田天哉という！これから宜しく頼むぞ！」

と、この光景に立つたままで居た私に向かつて飯田さんが私に気付いて話しかけてくれた。

彼は凄く律儀というか、カクカク動くというか、兎に角見てて面白いのだ。

その挨拶に釣られて大声になりそうになりながら、自己紹介を――

「あつ、はい！ 渡我反榴つて——」

「オイチビ女ア！ンでテメエまでA組なんだゴラア！」

「うえふん」

——出来なかつた。

——と、いうか爆豪さん？ 貴方入試で話し掛けた時の冷静さはどこに行つたんですか？
「……その、なんだと言われましても……受かつたからとしか言えませんよ？」

「……チツ!!」

「なんだいその態度は？……あ、渡我さんの席はあそこだな！」

その尊大な態度に、ええ……と苦笑いして、飯田さんの案内を受ける。

座席は瀬呂さんの次で常闇さんの前。

番号でいうと、ひい、ふう、みい……13番目だろうか。

そして、この間にさつと周囲を見回して確認する。

（砂藤さんの席が障子さんになつてますね……砂藤さん、南無）

ここには居ないスイーツコック（私が勝手にそう呼んでいるだけだが）に向かつて、心の中へ合掌をしておいた。

「おはようござりますく」

「おう、おはよう」

「おはよう」

「よいしょつと……あら」

前後の二人に軽く挨拶をして席に座ると、丁度緑谷さんと麗日さんが来たところだつた。

そんな緑谷さんは飯田さんと爆豪さんが居る事に顔を青くし、その後案の定絡まれてしまう。周囲はなんだか疲れたようにため息をついたりしている人も居る事から、ずつとこんなだつたのだろうか。

「H.R始まるぞ。お友達ごっこがしたいならよそへ行け、ここはヒーロー科だぞ」と、爆豪さんがヒートアップしそうになつたタイミングで割り込む声が。

私は座高的な意味で見えないが、恐らく相澤先生が寝袋で寝転がつているあのシーンだろう。

あ、起き上がつた。

無精髭に生気の感じられない目、伸びっぱなしの髪となんとも不安になる容貌にクラス一同が困惑する中で自己紹介を終わらせた相澤先生は、周囲のその視線を物ともせずに言い放つた。

「早速だが、机の中に君達の分の体操服が入つてゐるはずだ。それを着てグラウンドに

集合。
10分で支度しろよ』

入学・レクリエーション 2

相澤先生の10分は絶対だ。

遅れただけで除籍、なんて事も有り得る。
だつて除籍147回だもの。

早く行かないと駄目だよねえ、と頷いて体操着を手に椅子から飛び降りる。
ここ大事。

私の身長だと座つても床に足がつかないので、これはしようがない事なのだ。
そう自分に言い聞かせて、飯田さんの誘導の下私達は更衣室へと足を向ける。
なんか凄い微笑ましい視線を感じたが、あまり気にしない事にした。

更衣室、広い（驚愕）。

雄英つてここまで全部が広いってことあつたっけ？（困惑）
いやあるか、だつて雄英だもん（察し）。

「ロッカーも割と高い位置に……ふんつ」

「あ、踏み台あるよ?」

ロツカーでさえかなり高い位置にある事に少々の苛立ちを感じながらも格闘していくと、横から踏み台が渡される。

「ふえ？ わ、ありがとうございます♪えと、あなたは……」

う。渡してくれた彼女――白目が黒く染まり、肌が桃色で角の生えた同級生に礼を言

確か彼女は

「アタシは芦戸三奈！そつちはなんて言うの？」

「私は渡我反櫻つて言うのです、よろしくですよ～……ふはつ」

「うん！お互い宜しえ？」

お互いにYシャツを脱ぎながら軽い自己紹介……おつと。

「いやいやいや！ 待つて待つてなにその傷跡!?」

芦戸さんのその一言で、女子の興味が一瞬で私に集まる。正確に言えば、私の身体に付いている夥しい数の傷跡だが。

「ふえ？ あ、これですか」

「アタシは良く解かないけど、なんでそんなに絆創膏が……？」

ぺたぺたと腕やお腹、終いには足元を見てこんな所にも……！と息を呑む彼女を見て、そういえばこれは誤解されちゃうよなあと内心苦笑いを浮かべる。

「ねえ、私蛙吹梅雨っていうの。梅雨ちゃんって呼んで」

「あ、はい梅雨ちゃん。どうしたのですか？」

そんな私に次いで話しかけたのは、猫背のままでこちらを見る少女。

彼女は先程も言つたように蛙吹梅雨。

確か個性は……蛙っぽい事が出来るとか言つてたつけ？

「私、思つた事を正直に言つてしまふの。……渡我ちゃん、虐待とかされてないかしら

？」

「ああ、そう見えちゃいますよね」

そんな彼女が申し訳無さそうに言つた事に、私はまあそうだよねと返す。
でも。

「私、お姉ちゃんが大好きなのです。お姉ちゃんも、私が大好き。だけど、お姉ちゃんの愛情表現は皆さんから見たら”変わっている”のですから、皆さんには誤解されてしまうかもです……でも、これは私とお姉ちゃんの愛の証……だから、これはなんの問題もないですよ？ただ、表現方法が周りとは少し違うだけで」

淀みなくそう言い切つた私は、無意識に肩を撫でていた。

そこはガーゼで隠れてはいるが、毎日姉が私を一番愛してくれるばしょ。
着替えは、既に終わっていた。

「まあこの学校にはリカバリーガールという凄い治癒師さんがいらっしゃるということ
で、もし治癒されたらこの傷跡は殆ど無くなってしまうかもですけど……私とお姉ちゃんは相思相愛なので、明日にはまたこうなつてますよ? 断言できるのです」

「わーお……」

そう言つた私に返つてきたのは、服だけが浮いた透明な娘。

この娘は葉隱透だつた筈。

自身が透明になる個性で、そのせいか声音と動きによる表現が大きい。

それでもまだ皆の不安は拭えない…………あ、それなら。

「もし信じられないのでしたら、少々過激ですけど今夜のコレを撮影して——
吸血」

「「「駄目駄目駄目駄目!!」」」

「うにやん」

止められた、つていうか被せられた。

叫んだのは芦戸さんと葉隱さん、そして……麗日さんと耳郎さんだ。

八百万さんはそんな破廉恥な事を……！とプリンスコ怒つて（怖くない）いて、梅雨ちゃんは仲がよろしいのね、良かつたわと冷静に理解してくれた。

「解り易いと思つたんですがねえ……」

「いやいやそれって絶対アレな展開入っちゃうやつでしょ！？」

「いやそれは……」

羞恥心から再起動した芦戸さんに捲し立てられ、思わず考え込む。吸血だけで終わつた日つて多分あつたよね……？

きつとあつた……いや、あつた、か…………？

……………うん、無い！

「……そうですね、毎晩そこまで行つてま」

「「「うわああああああああああああ！！！」」

「ぴやふん」

また被せられた、しかも今度は先程よりも大声で。

ああ、皆が皆混乱してゐるよ、梅雨ちゃんだけ凄い冷静だけど。

「まさかのほほんとした渡我ちゃんが一番大人だつたなんて……」

「そこ」までつて??まさかそういうこと……??

「あわわ、あわわわわわわわわわわ」

「うー……やば、すい」「うー……やば、すい」

「反榴ちゃんはお姉ちゃん想いなのね、凄く良いと思うわ」

「えへ、そうですか？嬉しいです♪」

傍から見たらこんな地獄絵図とも見紛うのだろう。

葉隱さんは解らないけど、叫び声を上げたもれなく全員（それに加えて八百万さんも）が顔を真っ赤にして慌て、ぶつぶつと独り言を零し続いている。

その隅で梅雨ちゃんとのほほんと会話をした私は、頭の片隅でそれとなく皆に向けて合掌をしておいた。

「……あのう、そろそろ行かないと遅れるですよ?」

だが、いつまでもそんな惨状を続ける訳にもいかない。

この騒動の発端である私が言うのもどうかとは思うが、そう口を出す。

イレイザーヘッド……もとい相澤先生はかなり合理主義だ。

1分でも遅れたらその日のテンションはきつと、いや確実に下がる。

「そつ、そうだね！取り敢えず反榴ちゃんは大丈夫だつて言うし、早く運動場行こつか

!

その意図を察したのかただただこの変な雰囲気から脱したいだけなのか、芦戸さんが声をかなり張り上げて全員の移動を促した。

その間、梅雨ちゃんと私以外の女子は例に漏れず顔が真っ赤だつた事をここに残しておく。

体力測定：アクセラレーション

私が運動場に来た時、男性陣は漏れなく驚きを顕^{あらわ}にしていた。

言われずとも解る、この腕やら肩に付いた絆創膏の事だろう。

そのうちの誰かからすつごく悲しそうな視線を感じたけど、残念ながら今回もスルーさせて頂いた。

——で。

「「個性把握テストオ!?!」」

どういう事だ、
と言うのは野暮である。
とい
う事
だ。

まあ私としてもここの中学校の校長の話が長いというのは知つてたし、相澤先生が半端ない程の合理主義なのも解つていたので軽くほほーと呟くだけだつたが。

「渡我」

「はい？」

「ソフトボール投げの記録つていくつだつたか覚えてるか」

ソフトボール投げ……中三の時は確か、

「6mです」

刹那、背中に感じる女性陣の視線が微笑ましいものになつた事に、私は気付かなかつた。

「じゃあコレ持つて投げる。個性を使つてもいい。円から出なれば何してもいい」
そう言つて投げ渡されたボール（金属製だが割と軽い）を投げようとして、はたと動きを止める。

私が投げたら漏れなく、そうなつてしまふのだが、念には念を入れて、だ。
「これつて地面に落ちる見込みが無かつたらどうなるんです？」

「ある程度の所で指示する」

「わかりました！」

短く返答した相澤先生に返事をし、私はメーターとは逆――つまり皆の方を向く。
そして、何をしているのかと困惑する皆の前で個性を発動。

ボールに向けて、『ボールが重力の影響を受ける』と『投げるボールの速度が遅い』、そして『投げたボールのベクトル』の全て反転させ、優しく、皆の居る方向の地面へ落とす。

「えいっ♪」

刹那、キュンツという短い音と同時にボールがメータ一の方向へ消える。クラスメイトの皆は何が起こったのか理解できないようだ。

「渡我、そろそろ止めとけ」

——と、ここで相澤先生がストップを掛けた。

「はい！」

そうしてボールに掛かつた個性を解除し、先生の提示する記録を見れば。

『8』

「「うええええやばあああああああ!!!!」「8とか見た事ねえよ!」「個性思いつきり使え」とか面白そう！」

それまで静かにしていた皆がどつと湧く。

だが。

「面白そう、か……ヒーローになるための三年間をそんな腹づもりで過ごす気でいるのか？」

瞬間、相澤先生の目が威圧感を持ち、クラス一同を黙らせた。

「……よし、トータル成績最下位のものは見込みなしと判断し、除籍処分としよう」髪を搔き上げたその顔は笑みを浮かべているが、纏う雰囲気からは除籍は絶対だとう意思も見える。

……まあ、原作を知っている私はこの後の展開も大体解るのだが。
だが、それを知らないクラスメイト達は騒然となる。

流石相澤先生、生徒の焚付が上手いと素直に感心した。
そしてここから除籍（笑）を掛けた個性把握テストが行われる訳だが、ここは短く見
所に絞つてご覧頂こう。

——50m走——

「番号順ですから……常闇さんですね」

「ああ、宜しく頼む」

ちらちらと私……の腕に視線を向ける常闇さんと並ぶ。

後で男性陣の皆さんの誤解も解いたほうが良いですねえ、と呑気に考えながら、合図
を待つ。

「用意、スタート」

「えいっ」

そして一步。

飯田さんが最速なのは最初の方に走ってくれた事で解っていたので、『私の足は飯田

さんよりも遅い』を反転。

先程の3つ重ね掛けよりも多めに精神力を消費したが、10年近く精神力の増加を続けてきた私には造作もない。

記録、2秒52。

勢い余つてスピードを下げる時に常闇さんの周囲をぐるぐると走ってしまったのは不可抗力だ。

だからそんな怖い目を常闇さんに向けないで峰田さん。

——握力——

割と純粹な力を試されるこの種目だが、ここでも私は個性が活きる。

だが、ここで『私は握力が弱い』を反転してしまうと、この時点でかなりの精神力を消費してしまうことになる。

この後の種目の為に精神力は温存しておきたい所だが、ならばどうするか。

答えは簡単。

『私が手を握る時の圧力が弱い』を反転すればいいのだ。

何故、と思う方に説明しよう。

この2つの事象については決定的に違う点があり、それは『対象が自分か自分が作った圧力か』である所だ。

私の個性は対象が自分に近ければ近い程に消費する精神力が増える。自分自身と自分が作る圧力では、この場合後者の方がローリスクになるという事。屁理屈になりそうだが、これで個性がちゃんと発動出来てるので良しとしよう。

記録、左672kg／右684kg／平均673kg。

八百万さんに次ぐ2位だった、やはり万力には勝てない。

——立ち幅跳び——

ここは少々代償が張るが『私のジャンプによる距離が短い』を反転させて飛ぶ。記録、20m43cm。

八百万さんの揺れるお胸を見て、あれ位あつたらお姉ちゃんも悦ぶかなあと思ついたら後ろから耳郎さんが、

「大丈夫だよ……渡我さんもまだ成長期が始まつたばかりなだけだから……きつと……」

と遠い目をして話しかけてきた。

私が数日寝込むというデメリットを介するならば理論上は可能だ、という言葉をぐつ

と飲み込んで、耳郎さんの背中を擦つておいた。

なお身長的な問題で耳郎さんには屈んでもらつた。

(周囲からの生暖かい視線が) 解せぬ。

——前屈——

ほぼ梅雨ちゃんと八百万さん、轟さんの戦いだつた。

梅雨ちゃんは舌を伸ばし、八百万さんは鉄の棒を手から出し、轟さんは手から氷を出
しと。

私? 平均ですがなにか?

記録、15 cm。

ここでテストの半分が終わり、あと残っている種目は……反復横跳びに上体起こし、
ボール投げ(私は除く)と持久走。

多分大丈夫だけど、不安なのは持久走かなあ……
順位を保つ為に個性の使用はほぼ必須だし、それに持久走はラストだ。
これは使い方を考えなければいけなさそうだ。

……所で、上体起こしのペアって誰だろう？

体力測定：アクセラレーション 2

10分の休憩を挟んでいる間。

「なあ」

木陰に座つて休んでいる私に向かつて、声が掛かる。

「はい、なんですか？えっと……」

「……轟焦凍」

赤色と白色の髪が真ん中できつちり別れ、左目の周囲を火傷痕でいっぱいにした物静かな少年。

かなりの闇を抱えた結構な曲者がなぜ突然私に……？と思うが、まずは自己紹介。

「轟さんですね、私は渡我反榴です！」

「渡我か」

「……」

そうして訪れる居心地の悪い沈黙。

お願い早く喋つて、この空気耐えられないの。

「……その、なんだ。お前も、か？」

「——はえ？……あー」

そう言つて、轟さんと自分の間で視線をうろうろ移動させて、そういう事かと思い至る。

確か彼は個性婚によつて産まれた子で、父であるエンデヴァーに強い憎悪を持ち。

母からは「お前の左側が醜い」と煮え湯を浴びせられてしまうという過去を持つている。

その過去と私のこの傷跡を見て、どこかシンパシーを持ったのだろうか。

「うーん……お前も、というと轟さんにも何かが？」

「…………まあ、な」

その言葉に、私は驚かない。

「…………深くは聞かねえんだな」

「いえ……どうせ他人が介入してどうこうとなる話題ではないと思うですもん。かと言つて何も言わない訳でもないですが……」

そこではあ、と一息置いて。

「……私のお姉ちゃん、重度の吸血愛好なんです。そして、それに応ずるように私も
マゾヒスト
被虐愛好で」

隣で、小さい呼吸の音が聞こえた。

「今まで両親はお姉ちゃんを非難して私を溺愛してましたけど、私がそعدと解った瞬間に「一人共家に帰らなくなつてしまいまして」

「……お前、それ」

轟さんの短い言葉にあははと笑いながら頷く。

「育児放棄、つてやつですね。11年間、私とお姉ちゃんは親の顔を写真でしか見てないです」

その言葉を発した一瞬だけ、風が強くなつた気がした。

「轟さん。そうして家に帰らなくなつた親を見て、果たして私はどう思つたか……解るですか？」

と、ここで休憩時間の終わりが差し迫つてゐる事に気付いて立ち上がる。
よいしょつと、と短く呟いて、轟さんの方を向く。

「――『これからもつと長い時間、お姉ちゃんと愛し合えるんだなあ』、ですよ」

きっと私の顔は、恍惚としたものとなつてゐるだろう。
しかし轟さんは何も言わず、私の話に耳を傾ける。

「私は私の事を愛してくれているお姉ちゃんの為に、お姉ちゃんにだけ向ける愛と本音をお姉ちゃんにだけ曝け出して、私の大好きなお姉ちゃんの為だけにヒーローになるのです。とても不純で、自己中心的でしよう?——でも、それが私の『なりたいもの』なのです」

みんなが集まつて来ているから、この話もそろそろ終わりにしようかな。

「轟さんは、どうです?……つて、所ですかね」

「……ああ」

「ほら、集まつてますし私は行くですよ?」

さつさと話を終わらせてつたかたーとその場から離れる。

「……」

その後ろで、轟は小さく歩きながら思案した。

個性婚へ対する親父への憎悪と母への哀しさが混ざり、絡まった糸のようになつて脳内を搔き乱す。

そんな頭の中をリセットするようにため息をつくと。

「…………なりてえもん、か」

誰にも聞こえない声量で、そう呟いた。

——とまあ、若干のイベントはあったが、気を取り直して個性把握テストだ。反復横跳びと上体起こしは正直な所特筆すべき所も無いのでカット。

……あ、記録？

反復横跳びが17回、上体起こしが18回だった。

うん、平凡。

そしてその後のボール投げも、一部を除いて普通な感じではあった。

緑谷さんが個性を抹消されて二回目の投げで人差し指をバキバキにしながらも爆豪さんの記録と並んだり、麗日さんが二人目の∞を記録したり。

いやでも八百万さん、大砲は流石に。

まあ個性で創つてるから駄目なわけではないけどもさ、なんか一人だけ違う事してるのよそれはもう。

流石推薦入学者と言うべきか、笑うしかねえと言うべきか。

ああでも良かつた持久走は皆思い思ひに走つて――

「「「バイクだああ!!」」

「え、免許は……??」

——いや一人だけ別の事してる人居たよ。

いやまあ酸で滑つたりエンジンで速度上げたりして居る人も居るけども、流石にそんな文明の利器が突然出ると思う？

出てきたんだよねえ……

緑谷さんがぼやいていたけど、ほんとに免許は大丈夫なの??

あつ、一応原付の免許持つ？ 家に保管してある原付バイクを模した？

それなら大丈夫だね！（思考停止）

「——じゃなくて、です」

「はっ、はい！」

グリンツ、とホラーゲームさながらの回転速度で前の八百万さんから緑谷さんへと顔を向けた。

突然話題を振られた彼が固まつたまま走るという奇妙な芸当を見せたところで、話を続ける。

「緑谷さんは大丈夫なので？？その指、中身がボロボロなんですよね？」
「う、それは…………その…………はい…………」

真っ向から指摘された彼が萎びた風船みたい（イメージ）に縮んでいく。私は指を負傷している緑谷さん、そして峰田さん等最下位組はかなり先発と離されている。

だからこの中でも必死に最下位争いが起こっているのだが、何をどうしようと峰田さんは私と緑谷さんの後ろ――つまり最下位に居る。

どうしてだよおおお、と後ろで叫んでいるが考えないことにした。

閑話休題。話を戻して

ここで私が緑谷さんの個性ワン・フォー・オールについて喋つてしまつても良いが、それだと機密を知つてるとかいう感じで普通にアウトだ。
だからこういう場合は――

「増強型……それもかなりの自傷デメリットですか？」

「うつ、うん……上手く行けばその自傷もなくせるんだけど、まだ使いこなせてなくて……」

「ほおー……でしたらやはり、地の強化と制御イメージの確立が最優先ですね」
こうして、それとなくアドバイスをする。

「うんつ……トレーニングは毎日欠かさずやつてるけど、イメージの方はまだ全然……」

「……イメージ……電子レンジの中の卵、だつたつけ？」

「……参考程度に、どんなイメージですか？」

「……電子レンジの中の卵が、爆発しな」

「その人教えるのに向いてないですね」

「うつツツツ」

おつと、本音が。

——ちなみに、除籍はちゃんと嘘だつた。

順位は私が5位で残りは原作とそう変わらなかつたのと、合理的虚偽つて言う時の先生のしてやつたり的な顔が印象的だつた事を残しておく。

帰宅・マイスイートホーム

放課後、1—A担任である相澤消太は書類を纏めた後に小さく息を吐いた。

生半可な覚悟でヒーローになられても良くない、”最高峰”から一度でも落とされる経験を糧に二度とブレない意志を持つて這い上がつてきて欲しい。

そんな思いを（口には出していないが）ぶつけ、校長から除籍の権限をもぎ取り、去年度はクラス全員を除籍処分にした。

今日のテストだつてそうだ。

彼は本気で除籍処分にするつもりだった。

だが、ソフトボール投げの時の彼——緑谷出久。

オールマイトから受け継いだワン・フォー・オールという、彼にとつては未だに未完成の個性。

全力でやれば腕や指を確実に使い物にならなくさせるような個性を、彼は贔屓しなかつた。

だから、だ。

『先生……まだ、やれます……!!』

『――面白い』

「…………ガキか、俺は…………いや」

緑谷
あの時の彼が、子供らしくなさすぎた。

洗練されていた理解速度と発展思考力、そして活用能力。

オールマイトからまとめてノートとやらを聞いたときは若干引いたが、これが良く出来てている。

幼馴染と言われる爆豪の個性でさえ極限まで解析されていた。

俺のもあつたのは流石に引いたが。

いや中身の事はどうでもいいのだが、無個性だった彼がそこまで見て、あの一瞬であそこまで考えたのだ。

……まあ、途中聞こえてきた「電子レンジの中の卵が爆発しないイメージ」とかいう

素人感満載なアドバイスはどうせオールマイト案だろうが。

――兎に角。

あの瞬間、彼は俺の考え方の向こうに行つたのだ。

そう、P u l s . U l t r a。

そんな瞬間を見た奴の誰が彼を除籍にできる？
居るわけ無いだろう。

あのとき芽生えた可能性を摘むなど、プロヒーローの風上にも置けない。

——そこまで思案して、大きく溜息をつく。

首をぐるぐると回し、ゼリー飲料の蓋を開けた。

……と、そういえば。

デューと勢いよくゼリー飲料を飲みながら、とある資料を探す。

引き出しの中にファイリングされた、今年のクラスの名簿。

しかしその中には、入試における成績も記されている。

その中をペラペラと捲り、ある地点で止める。

そこは彼女——『渡我反榴』のページ。

身長が124cmとかなり小柄で、それに合わない制服のサイズは姉の指定。

理由は将来の成長の為だが……来るのか不安になる所。

そして、その下の欄……入試成績を見、再三溜息をつく。

「(……なんなんだ、筆記全問正解とか)」

国100点数150点英150点理100点社100点の600点、それを上限きつかり。

そんなの見た事が無い。

何度も間違いかと思つたか。

何度も模範解答と筆記解答を見比べたか。

何度も校長に確認を取つたか。

しかし、信じるしかないのだ。

彼女が推薦入試を抜きにしても国内最難関の高校入試を首席合格したことを。
……というか、なんだあの腕の夥しい傷跡。

俺でさえ二度見したぞあれ。

顔と雰囲気からして虐待とかそういう類のものではないとは思われるし、女子の反応もそれとは違うそうだ。

むしろなんであんな赤面してたんだ女子は。

そしてその中心であろう渡我本人は何故そんなに平然としてられるのか。
しかしそれを本人に聞き出すのも教師としてどうかとなる為、聞けないのが現状。

爆豪緑谷轟とやべえやつらをA組に組み込んでしまったが。

——お前もか、渡我。

ついた溜息の数はもう、数えないようにした。

——そんな、『NEW A組のやべえやつ』と先生から断定された渡我本人は。

「おねえちやあ～ん♥」

「はるちやあ～ん♥」

自宅で姉とこれでもかという程にいちやつき始めていた。

帰つてきて早々お帰りのキスを何回かし、その後欲が爆発しないように程々にしながら姉と抱き合う形でリビングヘドナドナされる。

「ハルちゃんは今日何をしてたんです?」

よつこいしょ、と姉の膝の上に座つて向かい合い、適切な距離（個人差）を保つた私は今日あつたことを思い出す。

「うんと……個性をつかつて体力テストをしましたね」

「個性を使つて！成績は、どうだつたの!?」

目をキラキラさせながら顔を近付けてくる姉にドヤ顔を崩さず——いやちよつと崩して、

「5位でした……やはりみんな凄かつたですよ～」

そこからは、クラスメイトの個性の話題になつた。

八百万さんが創り出す個性で万力を作つて握力計を壊したり、峰田さんが葡萄みたいな個性で反復横跳び一位だつたり。

それで、一番の話題が。

「ボール投げの時、お姉ちゃんが好きそうな人居たですねえ」

「なにそれ誰!？」

勿論緑谷さんのことなのだが。

この話をした途端に姉の顔はさらに近付き、鼻が触れるほどにもなる。

これは見えてないなあ、と即座に理解した私は姉の唇をちゅつ、と塞ぎ、

「お姉ちゃん、まずは落ち着くですよ～？」

そうすれば、姉は顔を真っ赤にして適切な距離（個人差）に顔を戻す。

「う、はい……」

は――――――可愛い。

可愛すぎて心がきゅんきゅんしてぴょんぴょんします。

今すぐちゅつちゅしてもつといちやいぢやしたい。

――じゃなくつて。

「えっとですねー、その人の個性は増強型なんですけど――」

「……ハルちゃんは、トガの好みを良く解つてるのです」

そんな子には、デザートにプリンがありますよ、という続きに、やつたあゝと両腕を上げる。

「……あ、そうでした」

「？」

と、プリンに現を抜かすのも良いのだが。

「お姉ちやあん……私の制服、とつてもおつきかつたんですけどお……？」
珍しく目を開いてジト目を作り、薄笑いで姉を見る。

「……えつとー……」

「ぶかぶかだつたんですよ～？なんでか教えて欲しいですね～？」
目を逸らした方向に身体を向けながら袖をばつさばつと振り、左を向いた姉に追従し。

ねー？と問い合わせながらあつちにうろうろ、こつちにうろうろ。

「……ハルちゃんのぶかぶかな制服、カアイイじゃないですか」「許します」

「やたー！」

そして口を割つた瞬間に手の平コペルニクス的転回。

原作の緑谷さんさながらだな、これは。

「えへへ、ぶかぶかハルちゃんカアイイよう♪」

「んみゅう、むふふ」

——しかしまあ、ほんとに勝てないものだ。

頬紅くして恥ずかしがりながら言われたらそりや許さざるを得ないでしょ。

にまにまと笑みを浮かべる姉に両頬を弄ばれながら、私はうんうんとその話を自己完結させた。

さて、今日の夜ご飯は……あつ、シチューだ♪

授業：ルベライト

雄英高校の授業は、基本的に午前と午後で大きく分かれる。

午前は国数英など必修科目とその他科目の通常授業。

今日は現代文と英語だ。

先程セメントス先生が担任の現代文が終わり、現在はプレゼント・マイク先生が担当する英語なのだが。

『んじゃ、次の英文で間違っているのは……ハイミニガール！』

「これ以上ミニガールって呼ぶなら発言しないですよ？」

『アッハイ……じゃあ、渡我ガール』

「まつたくもう…………4番ですね」

『オウイエス！こここの文だけ関係詞の位置が一個前にズレてるぜ、見間違えんなよ！』

「「「（普通だ）」「」」

かなりテンションが高い以外には特筆することのない至つて普通の授業だったと記録しておく。

その後は昼食。

学食はランチラツシユが特性の食事を作ってくれることだが、生憎と私には姉から貰つた愛情たっぷりのお弁当がある。が、ランチラツシユのご飯はかなり気になるのが正直な所。——という事で。

「7人分の席、空いてるかなあ……」

「ランチラツシユの学食、とんでもなく美味しいって噂だからねえ」

「お姉ちゃんのとどつちが美味しいんでしようか……」

「私の家のコックとも……あら渡我さん、涎が垂れてますわよ」

「うにゅう」

A組女子全員集合、in学食だ。

というか、ひつろいのだこここの学食。

ワイワイガヤガヤと談笑する声の中、割と広めの席を頂いた私は取り敢えずみんなを待つ。

私は行かないのか、と聞かれるが私は何故か皆から分けてもらえる事になつたのだ。皆から貰うと思うとなんだか申し訳ないが、皆から気にしないでと言わされたので有り難く頂くことにする。

はい 閑話休題。

皆が食事を取りに行っている間、私がやる事と言えば姉との通話かメツセージ。どうやら今日はメツセージのようだ。

今はクラスメイトと学食です、と送れば『後で写真送つて』という返信と共にだらけた猫のスタンプが。

「うにゅうえへへ……」

やばい頬が緩む、愛おしすぎておかしくなりそう。

地面に着かない脚をぶんぶんと振つて落ち着かせる。

「そろそろ戻つてきてもいいんですがね……あ、 来ましたね」

「ただいまー！」

と、ちょうど良いタイミングで皆がお盆を持つて戻ってきた。

芦戸さんは生姜焼き定食、麗日さんと梅雨ちゃんはそれぞれ焼鮭と焼き鰯定食、耳郎

さんはチキンカツ定食、葉隠さんはラーメン、八百万さんはサラダに弁当。

ここからでもいい匂いが漂つてくるのは反則だと思う。

「すごいおいしそうです……」

「ああまた涎が」

「むにゅう」

「だねえ、ほんとに美味しそうやね！」

「それでそれで、反榴ちゃんのお弁当も！」

そうだった、早く開けなきや。

芦戸さんに急かされて桃色の弁当箱、その蓋をいそいそと開ける。
小さい箱の中の半分を占める白米と、残り半分に詰められた卵焼きに野菜。
そして――

「ハンバーグだ！ 淫い手が込んでるねえ……」

わあつと声を上げた葉隠さんの言うとおりだと思う。

ソースに絡まれたパスタが良い色になつてているのも乙だ。

「今日も朝から焼いてたですねえ……すっごく美味しそうです」「えつ、それ昨日の残りとかじやないの？」

「むふふ……昨日の夜ご飯はシチューだったのですよ、耳郎さん」

「うはー……家庭的というか、万能というか」

そう、私のお姉ちゃんは淫いのだ。

自分の事ではないが、とても嬉しくなる。

「反榴さんのお姉さん、料理がお好きなんですね」

「ですです。それにしても、八百万さんのお弁当も淫いですねえ」

「ふふ、反榴さんがお姉さんを自慢するように、私もシェフを自慢するのですわよ」隣に座る八百万さんが、慎ましく胸を張る。
動作が可愛い。

「ささ、食べよ食べよ・アタシからはお肉を一枚♪♪」

と、皆で褒める時間は終わり。

あまり長く話しても時間が押してしまった為、私達は手を進める事にした。

「私も私も！ラーメンあーんしたげる！」

「わあ～い♪」

ランチラツシユの美味しいご飯とお姉ちゃんの美味しいお弁当を頬張りながら、鰯つてあつたかなあ、と私はふと思つた。

戦闘訓練：バーチカル

午後。

「わーたーしーがー!!

普通にドアから来た!!」

という元気な決め台詞と共にやつて来たオールマイトの指示により、ヒーロー基礎学が始まる。

今回は最初の科目という事で、オールマイト主導の元戦闘訓練をすることになった。
そして押されるボタンと共に壁から迫り出される戦闘服。

入学前に要望されたものを元に製作された服の入ったケースがぎつしりと詰まつて
おり、ここにも雄英のハイテクノロジー感を覚えさせられる。

「着替えたら順次グラウンド^{コスチューム}に集まるんだ！」

その一言でオールマイトはさっさと戻つていつてしまふ。
その姿はどこか急いでいるようで。

まあ私はその理由も大体解るのでほーんと呟くだけだが。

まあそれよりも、だ。

「要望通りですかねえ♪」

そんな呟きを残し、コスチュームを障子さんに取つてもらつた私はスキップで更衣室に向かうことにする。

障子さんからの優しい目はもう、気にしない事にした。

——急いで着替えたと思ったのだが、もう既に男子の何人かはそこに到着していた。

「あらら、皆さん早いです♪」

「ムツ、渡我か…………よく似合つている」

「ありがとうございます、障子さん！」

そのうちの一人、障子目蔵さんが私に気付いて複製した口を伸ばす。

この複製腕、とても便利である。

索敵と俯瞰はお手の物、腕にもなるし口にもなる。

チエンジヤーでもつけたらかなり幅も広がりそうな気もする。

そして短く褒められた私の戦闘服を見やる。

この服装はいわゆるクラシカルロリィタという種類で、その中でも黒をベースにしたものに。

服の胸元は縦に白くタックは真ん中に3列あり、金色の刺繡がされた襟の先には胸元で蝶々結びにされた黒ベースネクタイ。

真ん中以外黒い部分は白い部分とはボタンでくっついており、裾の方には小さく黒いリボンがあしらわれ、下に着ている（というかくつっているというか）パニエがスカート部分の膨らみを強調している。

長袖の先は少し余裕を持たせてぶかぶかの萌え袖にした。

ハイソックスとブーツは真っ黒で、これも服に合わせてだ。

それにプラスして、頭には修道服に付いているベールを被つている。

クラシカルロリィタと修道服の夢のコラボレーション、一度やつてみたかったのだ。着換えた後すぐに写真は撮つておいたので、帰つてからお姉ちゃんに見せる予定である。

と、そんなことを考えているうちにクラスメイトが揃つてきた。

私もぼてぼてと小走りで皆の元へ。

「麗日さんの戦闘服可愛いですね～」
〔コスチューム〕

「そ、 そうかなあ……私のすつごくぱっぱつだし……でもつ、 渡我ちゃんのも可愛いよ！」

「ほんとほんと！ 小説のお姫様みたい～！」

「悔い改めましょ～…みたいなですかね？」

「そう言つて両手を組めば、 芦戸さんと葉隠さんがきやーと可愛い声を上げる。
「めつちや様になつてる」

「ですわね……実用性はどうなのでしょうか」

「ふつふつふ……それは訓練でのお楽しみです♪」

「そんな話をしていると、 私達の前に巨漢の男性が。

「そう、 オールマイト。」

「――さあ！ 始めようか、 有精卵共!! 戰闘訓練のお時間だ!!」

「そんな訳で、 訓練が始まる。」

「その前にオールマイト先生がカンペを読んで説明をし、 聖徳太子を羨んだりと一悶着
はあつたが、 それはそれで。」

「チーム分けの時間だ。」

私は砂藤さんの代わりに来たけど、誰となるのかはまだ謎だ。

原作では口田さんだつたが――

「…………宜しく頼む」

「先程振りです、障子さん！」

今回は先程より何かと縁のある障子さんとのBチームだつた。

父と子みたいな身長差だなあ、と自分で言つて凹んだのは内緒だ。

そんな私達に、ヴィラン敵としてJチームが相対する。

どうやら轟さんは砂藤さんのいたところに入り、Fチームになつたらしい。

ほへえそなつたの、と思いながら、障子さんの元へ向かい作戦会議を早速始める。無論、一番最初に始めようと移動したA対Dの戦いを見ながらだ。

「昨日の把握テストでお二人の個性は割と解つてゐるのですが、障子さんから見てあの二人ならどういう戦法を取るでしようか？」

今回私達はヒーロー側だ。

それを踏まえて、二人なら何ができるかをざつくり考える。

「…………瀬呂のテープを対象の周囲に張り巡らせ、その後二人で出撃が妥当かと思われる」

「やはりそうですね。ではこの際、窓も閉じられると思って良いかもです」

ああ、と短く頷く彼を見て、更に続ける。

「恐らく型は切島さんがタンク兼アタッカー、瀬呂さんが遠距離の妨害」「……俺はこの複製腕と…………渡我、お前の個性は一体?」

と、ここで私ははつとする。

「あつ、言つてませんでしたね。私の個性は「反転」というのですが——」

「——というわけです。これを使って狙つてみましょう」

「心得た」

そうして話し終えた私は、両手に持ったソレをとある場所に仕舞い込む。

これは、恐らく私達を勝たせてくれる要だから。

——そしてオールマイト先生の号令が響く。

結果は、Aチームの勝利だった。

戦鬪訓練：バーチカル 2

ヒーロー側と敵ヴィラン側はそれぞれ5分のインターバルを要し、その後号令を聞いて開始する。

「では……早速行つてきますね、お願ひします！」

ぼてぼてぼてぼてとビルに沿うような感じでとある場所へと早速走り出した私を、複製腕の一個が見送った。

その間に他の腕は耳になり、壁にくつついたり色々な方向に伸ばしたりして周囲を探る。

その間に私は準備を終え、5分が経つ前には戻ってきた。

「ただ今戻りました！中はどうでしたか？」

「…………見たところ、最上階の角にある大部屋を拠点としているようだ。二人分の足音と会話も、先程の作戦とほぼ変わらずだな」

「目の方も大丈夫でしたか？」

「ああ、窓にもテープが付いていた」

そこまで予想と同じならば、こちらとしてはこの上ない好都合。

「それであれば……はい、障子さん」

私はポケットに潜ませた袋を外し、障子さんに渡す。

「……………それか」

「ええ、これに引っ掛けば実質勝利です」

多分、目は開いていなくとも今の私は悪い顔をしているだろう。

それはそうだ、今からやるこの戦法はかなりトリッキーで驚かれる。ギャラリーから個性含めてどう言われるか、楽しみだ。

「つとと、これでも便宜上ヒーローなのですから、表情はちゃんとしないとですね」と、カメラがあることを思い出して頬をぐにぐにと解す。

私は爆豪さんじやないですし、と続けたら障子さんが少し吹いた。

『スタート!!』

そんな話をし終わつたと同時に、オールマイト先生の号令が掛かつたので、さつさと中に入ることにした。

障子さんを前にして私はその後ろを、足音を出さずに進む。体格的にも、障子さんで遮られて誤魔化せるからだ。

『——そろそろ来る、約3秒』

「了解です、手筈通りに」

通信機から来る声に短く頷き、障子さんが右腕を振りかぶる。

道は一直線で天井が高すぎず低すぎずの丁度良い位で、細道もなく窓もない。向ける先は、今はまだ虚空。

「ほつと」

私が数歩バツクステップをしたと同時に、障子さんが袋を高く投げた。

その、2秒後。

「ツ、発見したぞ!!」

「了解つ！」

右の角から切島さんと瀬呂さんが順に出て、下と上からそれぞれ攻めようと迫る。

——そこに。

シヨット＝ネイル
猫の爪

ヒュツ、という短い音と共に左手首から繰り出される小さい物体。

み

それは手首から出て障子さんの左脇を通り、飛ばされた袋に吸い寄せられるように進

ぱあんつ、と茶色の中身を派手に弾けさせた。

「んなツ!?

「つ、少し掛かつた……砂?」

そう呟く瀬呂さんに、してやつたりとニヤける。

後は、これだけ。

「では、二名様御案内です……スイツチ座標反転」

「な、何——」

「うおつ、待——」

刹那、二人の姿が目の前から焼き消える。

同時に出てきたのは、同じ砂。

自由落下運動に従いパサツと落ちた砂を見て、障子さんと目配せする。

「終わりです、核を取りに行きましょうか」

「了解した」

これまた短くやり取りを終え、迅速に建物を駆け抜ける。

——と、遠くで男子二人の叫びと思われる声と、何かが派手に落下する音が聞こえた。

「…………成程、そういうことか」

「ええ、大正解ですよ♪」

この音だけでどうやつたかを察することの出来る障子さんは凄い。
そう感心しながら、私達はさつさと核に触れた。

『ヒーローチーム、W I I I I N !!!』

試合後、地下のモニタールームにて。

「————さて、今回のM V Pは誰だと思う!?」

オールマイト先生の言葉に元気溌溂なヒーローチームと細かい擦り傷が目立つヴィランチームを見やり、満場一致で。

「「「渡我さん（ちゃん）です（だな）」」」

障子さんもうんうんと頷いて応える。

「何やつてるのか解んなかったけど、積極的に障子に話し掛けてたって事は多分渡我の案じやね？」

「始まる前に何してたのかとかも含めてそうだとと思う！」

「うん、そうだね！私も今回のMVPは渡我少女だと思う！……して、これはどういった作戦でどのような事をしたのか、良ければ説明をしてもらえるかい？」

上鳴さん、芦戸さん、オールマイト先生の順でそう言い、私に繋がれる。

はい、と短く頷いて少し言葉を選ぼうと考えた。

「そうですね……今回の作戦では、『制圧』することではなくより安全に核を『回収』することを視野に置いたのです。それを含め、瀬呂さんと切島さんペアは前者が妨害と遠距離攻撃、後者は近距離と防御という比較的バランスの取れたチームでした」

その言葉に、クラスメイトがうんうんと頷く。

「きっとお二人はテープで部屋と核を守り、その後攻めてくる筈です。ではそのバランスをどう崩すか……という点ですが、それが開始前のあの行動でした」「ウーム……それがだね渡我少女、実はそこ、カメラが回りきつてなかつたからあまり解らなかつたんだ！何をしていたんだい？」

それを聞いて、そうだつたんだと理解する。

それなら解らなくて当然だ。

「核のあるビルから約4軒離れたビルに罠トラップを仕組んだのです。最上階の一個下の広場に座標を置き、ビルの材質に『どんな衝撃が掛かつてもこのビルは崩れない』という要素から個性を使用し、特大の檻にしました」

ここで半分のクラスメイトが感嘆し、もう半分が疑問を持つ。

「話の腰を折つて申し訳ない、渡我君の個性は一体何なんだい？」

「あ、そうでしたね飯田さん。言うのを忘れてました」

と、ここまで話ってきて肝心なことを忘れていた。

頬をぱりぱりと搔きながら私は話す。

「私の個性は『反転』。色々なものの色々なことを反転させられるのです……例えば、オールマイト先生」

「ム、なんだい!?」

突然話を振られた先生は軽く驚くが、すぐに落ち着いて応答する。

「この砂を手に持つてもらつてもいいです？」

「ああ、構わないよ！」

そして彼から離れたところに砂の山を盛り、少し離れる。

スイツ
チ

「これは応用した個性の極一部ですが……座標反転」
刹那、砂の山とオールマイト先生の位置が逆転する。

「おお!?

先程も見た光景だが、皆はこれでも未だに現実味の無さを隠せなさそうな顔をする。

それは驚くだろう、何せこれは擬似的な瞬間移動なのだから。

「この砂は私が事前に『この砂は個性の影響^{ヴィラン}下に無い』という要素を反転させたもので、これを使うことである地点ともう一つの地点にあるものを砂を通じて反転させる事が出来ます」

「つまり、罠を仕掛けたビルにその砂を置いた後に彼らへともう一方の砂を掛ける。その後にその入れ替わりをすれば、敵は遠くに飛ばされ罠に掛かり、自分達は安全に核の回収が出来る訳ですね!」

「はいっ、そういう事です八百万さん!」

そこで計画の全容を理解した八百万さんがそう言い、クラス全体からおおーという声が上がる。

相変わらず完璧な推理、感服します。

「つーか俺ら、障子しか見えてなかつたな……」

「体格差で綺麗に隠れて全くわからんかつたし」

「ふふつ、そこも計算済みです♪ 障子さんは目と耳で位置の把握と盜聴、更に砂を掛けるときの死角としてもお願ひさせて頂きました！」

改めてありがとうございます、と感謝すれば、優しい目のままでうんと頷かれる。

「ウーン、体格差やそれぞれの個性を活かし、ビルや核に大きな損傷も無く極めて安全に立ち回れたね！ 悪い所のない完璧な作戦だつた！ 勿論負けてしまつた敵ヴァイラン側の作戦や

フォーメーションも良かつたよ！」という事で、この場の四人に拍手！」

そうしてわーっと喝采を浴び、私達の試合は終わりを告げた。

戦闘訓練：バー・チカル 3

——あれから。

轟さんは左を使わないと決意させるようなコスチュームでビル全体を凍らせて勝利し、梅雨ちゃんと常闇さんのスキのない連携で青山さんと芦戸さんを終始圧倒させたりとそれぞれがそれぞれの戦法を駆使して訓練を続けていく。

その間、爆豪さんは何も言わずにスクリーンをじっと見つめるだけだった。自尊心の塊である彼に、あの戦いは相当堪えたのだろう。

言葉を発さず、周囲の喧騒に一切の反応も見せずにただただスクリーンの一点だけを焼き切れそな程に見つめる彼には、一種の信念さえ感じられる。

ナードと言い続けて下に見ていた緑谷さんに動きを読まれ、対決で負け、そこにプラスで八百万さんのあの酷評。

更に言えば轟さんのあの圧倒的な個性。

それを見せつけられれば、彼のちっぽけな自尊心など安易に碎かれる。

現在は上鳴さんと耳郎さんのペアがヒーロー側で、八百万さんと峰田さんのペアが
敵側だ。
ヴ
イラン

私は気付かれないよう爆豪さんを見、そして彼にぎりぎり聞こえるように。

「麗日さん芦戸さん、これが終わつたら放課後に反省会でもするです？クラスで色々な意見があるので、今後に役立つと思うのですよ」

「あつ、いいね！アタシ他にやりたい人居るか聞いてみる！」

「ウチも参加しよつかなあ……反省点多かつたし」

「人それぞれですよ、私とてこういうのは初めてですし」

「お……？」と凹む麗日さんをフォローする。

まあ、私が言うのもどうかとは思うのだが、それはそれ。

私も完璧ではないのだ。

「さて、この試合も終わつたし、あの四人に講評を伝えたら全員で入口に集合しよつか！」

そんな私達に、オールマイト先生から声が掛かる。

「氣付いたらあの四人も終わつている。」

「どうやら敵ヴァイラン側の勝利で終わつたようだ。」

「――お疲れさん！緑谷少年以外は大きな怪我もなし、しかし真撃に取り組んだ！初めての訓練にしちゃ皆上出来だつたぜ！」

出口前、全員が集まりオールマイト全員の声に耳を傾ける。

やばい、後ろに来ちゃつたから姿が見えない……！

「相澤先生の後でこんな真つ当な授業……なんか拍子抜けというか……」「真つ当な授業もまた私達の自由さ！……それじやあ私は緑谷少年に講評を聞かせねば！着替えて教室にお戻り！」

眩いた誰かの声にしつかりと返答したオールマイト先生は、そう言うとさつさと戻つてしまつた。

急いでいるように見えるのは、時間がないからだろうか。

この後リカバリーガールに怒られるんだろうなあと考へながら、私は更衣室へ向かう麗日さんと並んで。

「教室に戻つたら、先に反省会をしてもらつてもいいですか？」

「ん？ いいけど、どうしたん？」

「戦闘服(コスチューム)に関する質問を相澤先生に聞きに行こうかなと」

目的はもう一個あるのだが、それは言わなくてもいいだろう。

「えつ、反榴ちゃんの戦闘服(コスチューム)つてあそこからまた変わるん？」

「今すぐにとはなりませんが……もう少し遠距離での手数を増やしたいなあと思つたのです。砂だけだとまだ乏しいなあつて」

そなんだあ、と返す麗日さんに、更に続ける。

「右手首にワイヤーフックを付ければ、いざというときの逃げにも即席の命綱にもなるしで良いですもんねえ……他にも近接武器を仕込んでおけば近付かれても割と対応出来ますし」

「もうそれ暗殺者やんけ！」

ブハッと麗日さんの吹く声にふふふと微笑み返し、私達は着替えを進めた。

放課後、用務員ルームのオールマイト先生を横目に相澤先生の元を尋ねる。
戦闘服のサポートアイテム追加に関してはパワーローダーに一任してからそつちに行け

視界の端でタイピングに苦戦しているオールマイト先生がちらつく。

「……解りましたです」

特徴的な髪とぶかぶかな服とが完全にあの姿になるために拵えたとしか言えず、違和感と実際見てみるとほんとなんでここにいるんだろうという困惑が頭の中を満たす。

「……どうした」

なんかもう我慢できないので、出来るだけ小さい声で、

「いえ、そのう……相澤先生、どうしてオールマイト先生があんなに瘦せておられるので

す？

「！？」

「びつ！」

言つたら相澤先生、問答無用で個性使つてきただんですが。

首がグリンつて、90年代の3Dゲームみたいな動きしてたんですけどすつごい怖い。

「……どうしてわかつた」

かなり小声なのに顔がすつごく怖いです先生。

「いえ、あのダボダボな服は増強型の典型的な悩みである『服にお金が掛かる』を表現しているのです。それで教員の中であの姿の人を誰一人見たことなく、髪型で予測できる人と言つたら……オールマイト先生、ですよね？」

オールマイト先生の個性は何か解らなくとも、シンプルな増強型であることは察しがつく。

それが身体全体に及ぶのであれば、オールマイト先生のあの痩せた身体にも合点が行く。

「…………絶対、バラすなよ」

前世の知識と見た限りの推理を駆使して説明すると、押し殺したような声で釘を差さ

れる。

私はそれに頷くしかなかつた。

やはりプロヒーロー、現実で実際に見つめられるとかなり迫力がある。

今はオールマイト先生に対し苦言を呈しているが、たつた一撃でそんなに雰囲気変わらるのか。

「…………まだあるのか？」

「あついえ、ないです、すみませんです」

じつと見つめてたな、と思い早足で失礼しました、と職員室を後にする。

多分先生からの警戒レベル上がつたな、と思いながら。

——そして、戻つて反省会に参加しなきや、と早足で教室に向かうその途中。

「ぶわっ」

「あア？」

よりもよつて爆豪さんと鉢合わせた。

戦闘訓練：バーチカル 4

ツンツン頭に腰履きのズボン、そして苛立ちを隠そともしない目付きの彼——爆豪勝己。

ぶつかつたのは、教室まであと数分もないところ。

そして爆豪さんの身体は教室に向いている。

「ここから導き出される答えは……」

「爆豪さんも反省会に」

「るつせえな殺すぞチビ女ア!!」

「ぴょえん」

なんでそんなに当たり強いの。

しかも被せられだし。

「うう……別に悪いなんて言つてないじゃないですか……」

「ぶつくさ眩いたのが気に食わないのかなんなのか、すつごい形相で睨まれるんですけど？」

「……チツ、オイチビ女」

そうしょぼんと凹んでると、不意に声が掛かる。

「……渡我つてちゃんと呼んでください」

「黙れ殺すぞチビ！」

「チビ言わないでください!!」

ねえなんで毎回チビって言うの爆豪さんは??

マイク先生にもミニガール呼ばれてるのに更に追い打ちでも掛けるの??
と、思つてたら。

「……癪だが、お前は俺よりも強え」

「ふえ?」

「え??」

あの爆豪さん本人が、私を強い?

「アア? 何か文句でもあんのかよ」

いや、文句というか。

「……私つて、爆豪さんよりも強いんです?」

「…………は?」

「…………」

「…………」

沈黙。

なんともいえない空気が、教室からちよつと逸れた廊下の辺りを包み込む。

「…………俺が強エつづつてんだから強エんだよこのチビ！」

「にやつ、だからチビって言わないでくださいって！」

「ハツ、どうだかな！本気なんか出してもねえお前なんかチビで充分だろうが!!」

そう鼻で笑われてムカアツとなり——ふと止まる。

「私ってそんなに本気出してないんですか？」

「お前自身の事なのに知らねえのかよ殺すぞ!?」

「ぴやう!?

更にキレられた。

右手から小刻みに爆破を起こしているその姿はまさしくヴィラン……じやなくつて。

怒りで釣り上がりまくつた目は直角に見え……でもなくつて。

ああもう、なんか爆豪さんの逆鱗に触れるようなことしか思い浮かばない。

「俺は!!……お前も越えて、一番になる」

そうして半ギレ（多分九割ギレ）の彼が一言大声を出し、その後落ち着き払つたトンで私に向かつて宣戦布告をした。

それを見て、ああ、彼はちゃんと決意したんだな、と不意に納得する。

「……分かりました、それなら追いつかれないとしないとですね」「すぐにブチ抜いてやるよ」

方や満面の笑みで、方や獰猛な笑みで。二つの有精卵は、教室の扉を開いた。

いつもより遅い、午後7時に家の扉を開いた。

多分ずっと待つてたのであらう愛しい姉からの接吻をされるがままに受け、そのまま抱き上げられてリビングへドナドナ。

今日は鰯の塩焼きのようで、電話をした後に温めてくれていたのだろう、ほかほかと湯気が立っていた。

「戦闘訓練、とても有意義だったのですよ」「はかつたねえ、ハルちゃん……んつ

「ん、
？」

姉の細められた瞼から覗く怪しい光。

その瞳に吸い寄せられるように再び、今度は深い口付けで互いの唾液を堪能する。これは今夜も長いな、と察したところで、今日は玄関から鍵の開く音が聞こえた。

「今日は来る日でしたか？」

「ううん、知らなーい」

突然来た来訪者にお互い首を傾げながらも、一旦と姉の膝から降りる。リビングの扉を開いたのは、案の定父だつた。

「…………居たのか」

「それはそうですよ？私とてご飯を食べなければ死ぬんですもの」

短く、無頓着そうにボソリと呟く父に律儀にそう返したら、背を向けられてリビングを出ていこうとする。

「食べないのです？」

「飲みだ」

「ですか…………」

三文字。

先程のも含めれば七文字しか、実の父と言葉を交わしていない。

そんなことを考えている間にも、父はリビングから消えていく。

その時チラリと、「お前らみたいな異常者が俺達と同じ食事をしているだけで気持ち

が悪くなる」みたいなことを目線で言われた気がした。

「——ツ」

いや、きっと口に出していたのだろう。

そうでないと、姉の手からギリギリなんて音が聞こえる筈がない。

そして、父が帰つてくるということは、同じ職場で働いている母もそろそろ帰つてくれるということ。

「……冷める前に、食べちゃいましょうか」

「…………ん」

この後にも続くだろう出来事に、私は内心で深い溜息を吐いた。

——結局のところ。

二度目の扉の音が聞こえたのは、深夜の三時頃だった。

その時個性で強化した耳に入つた音は、はふうという満足そうな溜息。

少し遅く聞こえる足音。

多分足が震えているのだろう、足音が聞こえる直前に薄い擦れるような音が聞こえる。

冷蔵庫の扉を開け、水を一杯。

『ふう……やつぱり彼の方が落ち着くわね』

そして、久しく聞いていなかつた母の声だつた。

その声も、何処か弾んでいる。

彼、とは誰だろうかと、考える間もなく察した。

——浮氣、又は不倫相手。

あんな声も、遠い昔に私達の名前を呼んだ時くらいだろうか、もつと前だつただろうか。

それとも、言われてなかつただろうか。

これは今度二人で確認しないといけないだろうな。

然るべき時に備え、然るべき武器を揃える為に。

二人で——私達だけで、生きる為に。

そう思いながら、私は包まれている姉の体温と混ざるように目を閉じた。

始演：ヴィラニズム

翌日の、静かとはまた程遠い朝。

ガコンガガガガ、という大きな音で雄英高校の正門が閉じられる。地面から反り立つた障壁が踏み入ろうとしたマスコミを止め、校内と校外を隔てた。

「あ、危なかつたですう……ありがとうございます、相澤先生」

「気をつけろ……と言いたい所だが、今のは向マスコミこうが悪いな」

マスコミの波に揉まれ、（身長的な問題があり）雄英バリアーに弾かれそうになつた私の身体を引き寄せた相澤先生は、ゆつたりとした動作で捕縛布を解く。

インタビューとかいう面倒極まりないものを避けるために個性を使つて隠れていたのが悪かつたかもしれない。今回は『渡我反榴はマスコミに気付かれやすい』を反転させていた。

その間に、私は原作のこの後について考えを巡らせていた。

確かこの後は学級委員長を決め、昼時に死柄木さんによつてセキュリティが突破される事態が起こる。

そしてU.S.Jで襲われる……といった流れだつた。

恐らくセキュリティが突破されたのは、私達がオールマイトと共に授業をする日程を把握するためだろう。

ワープゲートを持つ黒霧さんならそれは容易い筈だ。
ここで私が原作改変をしたとしても、恐らく――

「……マスコミに話しかけられないようにと、個性を使つたのが仇になつたです」
「良い使い方だが、デメリットもよく把握しておけ」

その後に続くであろう本音を押し留め、はあいと相澤先生の言葉に了承した。

さくさくとした衣がくつついた鰯を、小さな口を開けて頬張り咀嚼。

時間が経つてもサクサク感の残る竜田揚げをご飯と一緒に飲み込み、もう一口。

「あむ」

「……ほんと、美味しそうに食べるよね」

「うん、やつぱり……愛情、なのかなー？」

野菜炒め定食を食べて一息ついた耳郎さんが誰となく咳き、その言葉に隣でサンドイッチを飲み込んだ葉隱さんが反応する。

水で喉を潤した私は、ですねえと首肯。

「平日は毎日作つてもらつてゐるですから、お姉ちゃんには感謝してもしきれないですね……チウチウしてるので毎夜遅くなつてしまふんですけど、浣瀬と言いますかエネルギッショと言ひますか」

「ぶつ、げほつごほつ!?」

そうして続けた言葉に、耳郎さんが口に含んだ水を吹いた。

「あはは……反榴ちゃん、後半の言葉はあまり人がいる空間で言わないようになにね?」
「?はい、です?」

……なんだかよく分からなかつたけど、控えて欲しいならばそうしよう。

そんな私達のテーブルの隣では、丁度飯田さんが家族について話しているところだつた。

そしてこの後、セキュリティが突破されて食堂は混雑するのだが。

「んー（どうやつて回避したら良いですかね……）

ざわざわと一斉に食堂から移動すれば、野菜炒めやサンドイッチは例に漏れず悲惨なことになるだろう。

私の弁当?ちよつとでも触れたら反転で吹き飛ばしますがなにか?

——はい、
話 を戻して
閑話休題。

未来予知じみたものなんてやつても変に疑われるだけですしねえ、と思つたが、ここでぱろつと一つだけ思い浮かんだ案が。

半分位無理矢理感あるけど、今更だしいつか。

「お二人共お二人共、なんだか嫌な予感がするのですよ」

「どうしたの？ 突然そんなこと言つて」

「嫌な予感？ ウチは何も感じないけど……」

「オトナの女の、勘^{カ・ン}…………なのです」

そんな風にめかして良い、とある事象を反転。

すぐさまがくつと精神力が削られるが、回復速度を底上げして意識を保ちながら続ける。

「——今私とお話なさつたお二人に、人が寄り付きにくくなるように個性を使いまし
た。なので、このまま何があつても座つて待機してください。今回は『私が個性を使用
する直前に話していた二人の周囲に人が寄り付きやすい』を反転」

「??」

突然の個性使用に二人が完全に固まるが、その理由はすぐにわかるだろう。

「ほら——來ましたよ」

私がそう呟く直前に、セキュリティ3の突破を知らせるアナウンスが私達の耳を刺す。

そうして我先にと外へ出ようとする生徒達が私達の周囲を避けて一方に向かつていくのを見て、二人は啞然とし。

この空間を作った私は、二人へ小さく笑つて人差し指を口に当てるのだつた。

——そうして原作通りにセキュリティが崩壊によつて突破され、その後のH.Rで飯田さんが学級委員長になつた後。

放課後を告げるチャイムが鳴る中、私の脚はとある場所へと向いていた。

「パワーローダーせんせー、いらっしゃるですかー？」

「勝手に入つとけよオー」

扉の向こうから聞こえる声にはいー、と返事を返して中へ。

校舎の一階にある工房、そこは掘削ヒーローのパワーローダーが管轄をしている。

その中にはあのアイテムベイビーガールな発目さんも入り浸つてゐるのだが、今日は居ないようだ。

しかし……中々に厨二心操られる秘密基地。

これは緑谷さんが感心するのも否定できない。

「さて……イレイザーから軽く話は聞いてつから、詳しく述べなさいな」

近くにあつた椅子に座り、コスチュームについての資料を渡しながら口を開く。

「えつと……左手首にある猫の爪以外で攻撃に使えそうなものを一つ、右手首に潜ませたいのです」

戦闘訓練でも喋っていた、遠距離攻撃の不足。

それもあるが、接近されたときの対処とかも含めてそこは必要になつてくる。

「遠距離かア……射出型で良いのか？」

「出来れば、射出と装備両方あると嬉しいです」

ナイフを手首から出して遠距離からぶつけるもよし、手に持つて近接戦闘するもよし。

普段は零れたり誤射しないようにロツクを掛け、使用時にワントッチで解除できるようになればそこらへんもどうにかなるだろう。

それになにより――

「――ゴスロリとナイフつてギャップ、良くないですか」

「――よオく……分かつてんじやねえか……」

――私達は、ガツチリと握手を交わす。

始
ま
り
の
日
の
直
前、
こ
の
や
り
と
り
で
私
の
計
画
は
全
て
成
つ
た
の
だ
っ
た。